

第3節 訓練効果が認められた群

— 「表情のみ」の呈示条件で10%以上の改善が認められた群 —

ここでは、写真による訓練が終了した者（回数制限により、訓練で規定された基準を達成できなかった者を含む）のうち、「表情のみ」の呈示条件で10%以上の改善が認められた6名についての訓練経過をまとめる。まとめに際しては、訓練内容により、「写真による訓練のみを実施した対象者（A氏～D氏）」と「写真による訓練修了後、ビデオによる訓練を実施した対象者（E氏・F氏）」の2群に分けてまとめることとした。

また、この群に分類された6名の混同の傾向については、訓練前後で次のような変化が認められた。

D氏を除く他の5名は、訓練前の段階では「表情のみ」の呈示条件において【快－不快】の混同が認められたが、訓練後はA氏・C氏・E氏の3名においては【快－不快】の混同は解消され、B氏・F氏についてもそれぞれ改善が認められた。

1-1. 訓練対象者：A氏（18歳男性）知的障害（手帳取得予定）

／「学習障害」を主訴とする

訓練前のコミュニケーションのタイプは、「表情依存（対象者は、表情からの影響を音声からの影響よりも強く受ける）」であり、表情からの他者感情の識別が改善されることで、「音声+表情」にも改善が期待される事例

表2-2-3 訓練前後の正答率及び混同傾向の変化

		【 訓練前 】					【 訓練後 】				
音声のみ	呈示された	回答（正答率 84.0%）				呈示された	回答（正答率 78.0%）				
	音声	幸福	悲しみ	怒り	嫌悪	音声	幸福	悲しみ	怒り	嫌悪	
	幸福	7			1	幸福	8				
	悲しみ		7	1		悲しみ		5	1	2	
	怒り			8		怒り			8		
嫌悪		1	2	5	嫌悪		2	2	4		
表情のみ	呈示された	回答（正答率 63.0 %）				呈示された	回答（正答率 94.0 %）				
	表情	幸福	悲しみ	怒り	嫌悪	表情	幸福	悲しみ	怒り	嫌悪	
	幸福	8				幸福	8				
	悲しみ	1	4		3	悲しみ		8			
	怒り		2	5	1	怒り		1	7		
嫌悪			5	3	嫌悪		1		7		
音声+表情	呈示された	回答（正答率 69.0%）				呈示された	回答（正答率 91.0%）				
	音声+表情	幸福	悲しみ	怒り	嫌悪	音声+表情	幸福	悲しみ	怒り	嫌悪	
	幸福	6	1		1	幸福	8				
	悲しみ		5	1	2	悲しみ		7		1	
	怒り			6	2	怒り			7	1	
嫌悪			3	5	嫌悪			1	7		
<p>◆正答率：「音声のみ」において健常者とほぼ同程度であるのに対し、「表情のみ」「音声+表情」のいずれの条件においても低い。</p> <p>◆混同：「音声のみ」「表情のみ」「音声+表情」のいずれの条件においても、【快-不快】の混同が認めらる。</p> <p>また、「表情のみ」では、「悲しみ」を「嫌悪」と捉える傾向が認められる。</p>					<p>◆正答率：「音声のみ」「音声+表情」では健常者とほぼ同程度であり、「表情のみ」では健常者と比較しても十分に高い。</p> <p>◆「音声のみ」「表情のみ」「音声+表情」のいずれにおいても【快-不快】混同は認められない。</p> <p>「悲しみ」「怒り」「嫌悪」の3感情については、一部で混同が認められるものの、健常者平均を越えており、大きな問題は認められない。</p>						

注) 濃い網掛け部分はそれぞれ8が正答率100%を示す。ただし、「怒り」と「嫌悪」については混同があっても日常生活上、大きな困難を生じないと考えられることから、これらの2感情の混同の範囲を薄い網掛けで示し、正答に準じていることを表した。

A氏：		「幸福」の表情識別訓練				
		1	2	3-1	3-2	3-3
◆視知覚 特に困難は認められない	◆コミュニケーションのタイプ 表情依存・Tタイプ ◆訓練の必要性 タイプ K/訓練可能性あり ◆感情の理解 特に困難は認められない	顔の要素	合言葉	特徴 表情を作る	自己教示 (外顕)	自己教示 (内潜)
×		○	— ×	○	△	
「どこを見るかわからない」 「普段あまり人の顔は見ない」		3-1：鏡を見ずに下を向いてしまう 3-3：特徴をさわることはできるが、台詞が でてこない ↓ カードを見ずに台詞が言えるようになった				
← 1回目 →						

「悲しみ」の表情識別訓練					「怒り」の表情識別訓練				
復習	4-1	4-2	4-3	4-4	復習	5-1	5-2	5-3	5-4
合言葉 特徴の確認	顔の要素 表情を作る	自己教示 (外顕)	自己教示 (内潜)	「幸福」 「悲しみ」 弁別課題	合言葉 特徴の確認	顔の要素 表情を作る	自己教示 (外顕)	自己教示 (内潜)	「幸福」 「悲しみ」 「怒り」 弁別課題
○ △	△ △	○	○	△	○ ×	— ○	○	○	△
復習(特徴)：「幸福」の「鼻の脇にしわ」 × 4-1：要素は「目」と回答 鏡を見ない状態でなら表情を作ることができた 4-4：4回実施/後半2回連続正解 誤り：20代男性 「幸福」 → 「悲しみ」 20代女性 「悲しみ」 → 「幸福」					4-4：1回実施/正解 復習(特徴) 「幸福」 思い出せなかった 「悲しみ」 眉に山 5-4：5回実施/後半4回連続正解 誤り：40代男性 「悲しみ」 ↔ 「怒り」				
← 2回目 →					← 3回目 →				

「嫌悪」の表情識別訓練					4感情の表情識別訓練①			
復習	6-1	6-2	6-3	6-4	復習1	復習2	6-4	般化
合言葉 特徴の確認	顔の要素 表情を作る	自己教示 (外顕)	自己教示 (内潜)	「幸福」 「悲しみ」 「怒り」 「嫌悪」 弁別課題	合言葉	特徴の確認 台詞の確認	「幸福」「悲しみ」 「怒り」「嫌悪」 の弁別課題	プロトタイプ写真 の弁別課題
△ ×	— △	○	○	△	○	△注	△	○
5-4：1回：OK 復習(合言葉)：5カ所の特徴は言えたが、合言葉は忘 れていた。 (特徴)：すべて忘れていた ↓ 台詞の確認をする/台詞を言いながら再度、弁別する 5-4：3回/2回正解 誤り：20代女性 「幸福」 ↔ 「悲しみ」 6-1：鏡を見ない状態でなら表情を作ることができた 6-4：1回実施/正解なし 誤り：20代男性 「嫌悪」 → 「怒り」 40代女性 「嫌悪」 → 「怒り」					注：前回、台詞の確認が十分ではなかったため、台詞 の確認をしてから始めた 復習2(特徴/台詞)：「幸福」「悲しみ」 → OK 「怒り」 → 眉のみ 「嫌悪」 → 忘れた 6-4：1回目：× 40代男性 「怒り」 → 「嫌悪」 2回目：× 40代女性 「怒り」 → 「嫌悪」 ↓ 「怒り」「嫌悪」の弁別 OK ↓ 「悲しみ」「怒り」「嫌悪」の弁別 → 3回実施/1回正解			
← 4回目 →					← 5回目 →			

1-2. 訓練対象者：B氏（19歳男性）知的障害（軽度）

訓練前のコミュニケーションのタイプは、「低受信型（対象者は、「音声のみ」「表情のみ」「音声+表情」のいずれの条件においても正答率が低い）」で、「正答率」「感情間の混同」ともに問題が大きい。また、訓練前は、表情の表出も乏しく、自発的なコミュニケーション行動があまり認められなかった。したがって、訓練では、これらの点についても、随時、指導することが求められる事例であった。

表2-2-4 訓練前後の正答率及び混同傾向の変化

		【 訓練前 】					【 訓練後 】				
音声のみ	呈示された	回答（正答率 38.0%）				呈示された	回答（正答率 72.0%）				
	音声	幸福	悲しみ	怒り	嫌悪	音声	幸福	悲しみ	怒り	嫌悪	
	幸福	4	2		2	幸福	7			1	
	悲しみ	2	4	1	1	悲しみ		7		1	
	怒り			4	4	怒り		1	7		
嫌悪	4	4			嫌悪	2	4		2		
表情のみ	呈示された	回答（正答率 28.0%）				呈示された	回答（正答率 66.0%）				
	表情	幸福	悲しみ	怒り	嫌悪	表情	幸福	悲しみ	怒り	嫌悪	
	幸福	2		2	4	幸福	8				
	悲しみ	2	3	1	2	悲しみ		6		2	
	怒り	2	1	3	2	怒り	1		3	4	
嫌悪	2	2	3	1	嫌悪		1	3	4		
音声+表情	呈示された	回答（正答率 19.0%）				呈示された	回答（正答率 72.0%）				
	音声+表情	幸福	悲しみ	怒り	嫌悪	音声+表情	幸福	悲しみ	怒り	嫌悪	
	幸福	4			4	幸福	8				
	悲しみ	6		1	1	悲しみ	3	5			
	怒り	3	1	2	2	怒り	1	1	5	1	
嫌悪	6		2		嫌悪	1	2		5		

- | | |
|---|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ◆正答率：「音声のみ」「表情のみ」「音声+表情」のいずれの条件においても著しく低い。 ◆混同：「音声のみ」「表情のみ」「音声+表情」のいずれの条件においても、【快-不快】の著しい混同が認められる。 | <ul style="list-style-type: none"> ◆正答率：「音声のみ」においてやや低く、「表情のみ」「音声+表情」の条件において低いが、訓練前と比較して、改善が認められる。 ◆混同：「音声のみ」「表情のみ」「音声+表情」のいずれの条件においても【快-不快】の混同は認められるが、訓練前と比較して著しい改善が認められる。 |
|---|--|

B氏：		「幸福」の表情識別訓練				
		1	2	3-1	3-2	3-3
◆視知覚： 特に困難は認められない	◆コミュニケーションのタイプ 低受信	顔の要素	合言葉	特徴 表情を作る	自己教示 (外顕)	自己教示 (内潜)
		×	○	△ ○	○	△
◆感情の理解 感情を表す4つの言葉(嬉しい・悲しい・怒っている・嫌だ)とそれぞれの感情を感じる場面についての説明は適切であるとはいえない。特に「不快」な感情については、回答を避ける傾向にある。		「(相手の気持ちを知るために見るところは顔)全体です」「人の顔を見るのは、得意ではない」「人の気持ちはあまり気にならない」		特徴：鼻が笑っている/口が引っ込んでる 3-3:「黙ってやる」ことができず、声になってしまう。		
		← 1回目 →				

復習		「悲しみ」の表情識別訓練				復習		「怒り」の表情識別訓練					
		4-1	4-2	4-3	4-4			5-1	5-2	5-3	5-4		
合言葉	特徴の確認	顔の要素	表情を作る	自己教示 (外顕)	自己教示 (内潜)	「幸福」「悲しみ」 弁別課題	合言葉	特徴の確認	顔の要素	表情を作る	自己教示 (外顕)	自己教示 (内潜)	「幸福」「悲しみ」「怒り」 弁別課題
○	○	×	○	○	○	△	○	△	×	○	○	△	×
		4-1:「『怒っている』顔」と反応したため要素は尋ねなかった。 4-4: 5回実施/2回正解(ただし連続正解はない) 誤り: 40代男性 「幸福」→「悲しみ」3回 40代女性 「幸福」→「悲しみ」1回				復習(特徴):「悲しみ」× → 目が下、しわ ↓ 台詞の確認をする 4-4: 5回実施/後半3回連続正解 誤り: 20代女性 「幸福」↔「悲しみ」 40代女性 「幸福」↔「悲しみ」 40代男性 「幸福」↔「悲しみ」 5-1:「『悲しい』顔」と反応したため要素は尋ねなかった。 5-3:特徴のすべてを「黙って」指さすことができない 5-4: 3回実施/正解なし <hr/> 復習(特徴):「悲しみ」× → 眉毛と鼻 :「怒り」 × → 眉毛と目としわ ↓ 台詞の確認をする 5-4: 6回実施/正解なし 混同は主として 20代女性の「幸福」と「悲しみ」 20代男性の 3感情間 ↓ ① 台詞を声に出して言いながら弁別 ② 特徴に触りながら弁別 ③ 鏡を見て、自分で各感情の表情を作り、特徴を確認してから弁別 ↓ 12枚中1枚程度の混同に減少							
		← 2回目 →				← 3回目 4回目 →							

「嫌悪」の表情識別訓練					4感情の表情識別訓練①			
復習	6-1	6-2	6-3	6-4	復習1	復習2	6-4	般化
合言葉 特徴の確認	顔の要素 表情を作る	自己教示 (外頭)	自己教示 (内潜)	「幸福」 「悲しみ」 「怒り」 「嫌悪」 弁別課題	合言葉	特徴の 確認 台詞の 確認	「幸福」「悲しみ」 「怒り」「嫌悪」 の弁別課題	プロトタイプ写真 の弁別課題
○ △	△ ○	○	○	△	○	△	△	×
復習(特徴):「幸福」→「怒り」と同じ特徴を挙げた 「悲しみ」→思い出せなかった。 6-1:「目が細い」/「鼻に横しわ」→○ 「眉」→× 6-4: 不正解:以下、台詞を言いながら弁別 「怒り」「嫌悪」の弁別課題 → OK 「悲しみ」「怒り」「嫌悪」の弁別課題 → 1回目 台詞が混同し、誤りあり → 台詞の訂正 → 2回目 OK 6-4: 1回実施/不正解 誤り:40代男性 「幸福」→「悲しみ」1回					復習(特徴):「幸福」「悲しみ」「怒り」→OK 「嫌悪」→× ↓ 特徴/台詞の確認をする 6-4: 3回実施/1回正解 誤り:20代男性 「嫌悪」→「怒り」1回 40代女性 「幸福」↔「嫌悪」1回 40代男性 「悲しみ」→「嫌悪」1回 プロトタイプ写真の弁別 「嫌悪」→「悲しみ」			
←————— 5回目 —————→					←————— 6回目 —————→			

4感情の表情識別訓練②			
復習1	復習2	6-4	般化
合言葉	特徴の 確認 台詞の 確認	「幸福」「悲しみ」 「怒り」「嫌悪」 の弁別課題	プロトタイプ 写真の弁別課題
○	—	△	○
6-4: 1回実施/不正解 誤り:20代男性 「悲しみ」↔「嫌悪」1回 40代男性 「悲しみ」↔「嫌悪」1回 ↓ ①「悲しみ」と「嫌悪」の弁別課題 → × ②鏡を見ながら特徴の確認 ③再度、「悲しみ」と「嫌悪」の弁別課題 → OK <div style="border: 1px dashed gray; padding: 5px; margin: 10px 0;"> 訓練終了基準には達していないが、回数の制約の ために、ビデオによる評価 <p style="text-align: center;">ビデオによる評価</p> </div>			
←————— 7回目 —————→			

(注1:4回目)
「悲しみ」と「怒り」/「幸福」と「悲しみ」の間で混同が認められたが、

- ①「鏡をみて、自分で表情を作り、特徴を確認する」、
- ②写真の特徴を指さし確認しながら分類する、

という課題を通して12枚の分類が可能となった。
 訓練期間の制約により、基準(3回連続して正解)に達していないが、次の課題(嫌なとき)に進むこととした。

(注2:6回目)
 写真16枚を分けることは徐々にできるようになってきているが、台詞の習得は十分でなく、写真を用いた訓練の修了基準に達していない。しかしながら、職場実習等の職業準備訓練のスケジュールを考慮し、次回、台詞の復習と併せてビデオによる中間評価を行うこととした。

(1) 写真による訓練課題の達成度

写真を用いた訓練では、「幸福」「悲しみ」「怒り」「嫌悪」の4感情の識別が十分に達成されたとはいえない。各表情の特徴を表す台詞の習得が不十分であることと併せ、表情から他者の感情を正確に識別できる力が十分に獲得されたとはいえず、ときに、混乱する場面も観察された。本対象者においては、さらに訓練を重ねることで、よりの確な識別が可能になると予想される。

しかしながら、訓練に用いなかった人物に対する般化の課題では正しく感情が識別できるなど、より一般的な場面にも対応できる可能性が示唆された。

(2) 訓練効果

写真を用いた訓練終了後の評価では、正答率・混同の傾向ともに改善が認められた(表2-2-4)。特に、網掛けの部分以外(ここに混同が認められると日常生活場面での困難が予想される)に注目すると「表情のみ」における改善は著しい。また、【快-不快】の混同はすべてが解消されたわけではないが、「表情のみ」において12あった混同が1に、「音声+表情」においても19あった混同が5に減ったこととあわせ、訓練の効果が示唆されたといえよう。

(3) 訓練過程における態度と今後の課題

B氏の場合、7回目の最終評価の時点でも、16枚+4枚(プロトタイプ)のすべての写真を正確に分類することができなかった。また、各表情の特徴を表す台詞についても十分に習得されたとは言い難い状況であった。しかし、訓練そのものについては、「写真をみてやろう」「今日は16枚をやる」などの発言にみられるように積極的な関与がうかがえた。

また、1回目の時点で、「人の気持ちを知るために、相手の顔を見るとどこを見るのか」という質問に対して、人の顔を見るのは『あまり得意ではなく』、『人の気持ちはあまり気にならない』と回答し、5回目では「表情の特徴が分かると何が分かるのか」という問に答えることができなかったのに対し、7回目では「人の気持ちが分かります」と答えるなど、訓練の目的についての理解が進んだといえる。これらのことから、訓練を通して「他者の表情をみる→人の気持ちを推測する」という構えが獲得されてきたといえよう。

また、訓練当初は、自分の感情を表情に表出するという態度もあまり観察されなかったが、訓練を通して、徐々に「他者の顔を見て話す」、あるいは「自分の感情を表情に出す」という態度が観察されるようになったことは訓練の効果として大きい。また、表情の表出に関しても、興味が喚起され、訓練者の促しがない場合でも、写真を見ながら、自分で「嬉しい」あるいは「嫌な」表情をして見せるなど、意欲的な取り組みが認められた。

これらの効果は、職業準備訓練の場面でも認められ、訓練前に観察された『話をするときには他人と視線をあわせない』『自発的な言葉があまりない』『話すときは友だち言葉で呟くように話す』などが改善され、他の訓練生との交流が活発になったことが報告されている。

本事例は、表情識別訓練プログラムが「受信」に関する改善だけでなく、「表出」に関する改善にも効果がある可能性を示唆している。B氏の今後の課題としては、他者の感情がよりの確に識別できるようになることに加えて、TPOを考慮して「自分の感情を表出できるようになる」ことが挙げられる。

1-3. 訓練対象者：C氏（18歳女性）知的障害（軽度）／軽度の自閉傾向

訓練前のコミュニケーションのタイプは特定の型に分類されなかった。「低受信型」ではないものの、「音声のみ」「表情のみ」「音声+表情」のいずれの条件においても、正答率は低く、【快-不快】の混同も認められた事例。

表2-2-5 訓練前後の正答率及び混同傾向の変化

		【 訓練前 】					【 訓練後 】				
音声のみ	呈示された	回答（正答率 63.0%）				呈示された	回答（正答率 88.0%）				
	音声	幸福	悲しみ	怒り	嫌悪	音声	幸福	悲しみ	怒り	嫌悪	
	幸福	8				幸福	8				
	悲しみ		7		1	悲しみ		7		1	
	怒り	2			6	怒り			6	2	
嫌悪	3			5	嫌悪			1	7		
表情のみ	呈示された	回答（正答率 66.0%）				呈示された	回答（正答率 78.0%）				
	表情	幸福	悲しみ	怒り	嫌悪	表情	幸福	悲しみ	怒り	嫌悪	
	幸福	8				幸福	8				
	悲しみ	1	6	1		悲しみ		7		1	
	怒り		1	5	2	怒り		3	5		
嫌悪		2	4	2	嫌悪			3	5		
音声+表情	呈示された	回答（正答率 63.0%）				呈示された	回答（正答率 97.0%）				
	音声+表情	幸福	悲しみ	怒り	嫌悪	音声+表情	幸福	悲しみ	怒り	嫌悪	
	幸福	8				幸福	8				
	悲しみ		8			悲しみ		8			
	怒り			2	6	怒り			8		
嫌悪	1	3	2	2	嫌悪			1	7		

◆正答率：「音声のみ」「表情のみ」「音声+表情」のいずれの条件においても低い。
 ◆混同：「音声のみ」「表情のみ」「音声+表情」のいずれの条件においても【快-不快】の混同が認められる。

◆正答率：「音声のみ」「表情のみ」「音声+表情」のいずれの条件においても健常者の平均とほぼ同程度である。
 ◆混同：「音声のみ」「表情のみ」「表情+音声」のいずれにおいても【快-不快】混同は認められない。
 「悲しみ」「怒り」「嫌悪」の3感情については、一部で混同が認められるものの、正答率は健常者平均とほぼ同程度であり、大きな問題は認められない。

C氏：		「幸福」の表情識別訓練			
		1	2	3-1	3-2
◆視知覚： 特に困難は認められない ◆コミュニケーションのタイプ 特定の型に分類されない ◆訓練の必要性 タイプN / 訓練可能性あり ◆感情の理解 「怒り」と「嫌悪」の違いについては明確に分化しているとはいえないが、基本的に感情を表す4つの言葉（嬉しい・悲しい・怒っている・嫌だ）とそれぞれの感情を感じる場面についての対応は了解可能である。	顔の要素	合言葉	特徴 表情を作る	自己教示 (外顕)	自己教示 (内潜)
	△	○	× △	○	○
	△	△	△ ○	△	○
				○	○
	ほぼ・おでこ・目・しわ（怒るとおでこによる） 眉毛（への字だと怒り） 「自分の気持ちが、自分で分からないことがあります」		3-1（特徴）：沈黙 3-1（表情）：鏡を見ることができない。訓練者に対して「笑ってみる」という課題では、訓練者の目を見ることができない 【2回目】 復習（合言葉）：「歯」→「鼻」と回答 3-1（表情）：「台詞（おはようございます／さようなら 等）をいいながら」 笑顔を作るという課題では鏡を見ることができる 3-2：「鼻にしわ」となることがある		
		← 1回目 → ← 2回目 → ← 3回目 →			

「悲しみ」の表情識別訓練					「怒り」の表情識別訓練				
復習	4-1	4-2	4-3	4-4	復習	5-1	5-2	5-3	5-4
合言葉 特徴の確認	顔の要素 表情を作る	自己教示 (外顕)	自己教示 (内潜)	「幸福」「悲しみ」 弁別課題	合言葉 特徴の確認	顔の要素 表情を作る	自己教示 (外顕)	自己教示 (内潜)	「幸福」「悲しみ」「怒り」 弁別課題
△ ○	△ ○	△	○	○					
				○	○ ○	○ ○	○	○	○
							○	○	○
復習（特徴）：「ま」→「まぶた」と回答 4-1（要素）：「目」と回答 4-2：3つの特徴のうち、どれかが抜けることがある 4-4：3回実施／3回連続正解					【4回目】 4-4：1回実施／1回正解 5-1（要素）：「眉と目」と回答 → OK 5-4：2回実施／2回連続正解 ★「相手が怒っていたら、どうするか」という問いには → その行動をやめる と回答 【5回目】 5-4：1回実施／1回正解				
← 3回目 →					← 4回目 → ← 5回目 →				

「嫌悪」の表情識別訓練					4感情の表情識別訓練①			
復習	6-1	6-2	6-3	6-4	復習1	復習2	6-4	般化
合言葉 特徴の 確認	顔の 要素	表情を 作る	自己 教示 (外頭)	自己 教示 (内潜)	合言葉	特徴の 確認	「幸福」「悲しみ」 「怒り」「嫌悪」 の弁別課題	プロトタイプ 写真の弁別課題
○ ○	△ ○	○	○	△	○	△	△	—
6-1 (要素): 「目・眉・口」 6-4: 1回実施/不正解 誤り: 20代男性 「悲しみ」 ↔ 「嫌悪」 ↓ 20代男性の写真を用いて特徴を確認し、弁別へ (2回正解) 6-4: 1回実施/不正解 誤り: 20代男性 「悲しみ」 → 「嫌悪」 20代女性 「怒り」 → 「嫌悪」 ↓ 20代男性の写真を用いて特徴を確認し、弁別へ (5回実施/後半4回連続正解)					復習2: 「嫌悪」 → × 「眉が上、目が嫌だなぁ」 6-4: 1回実施/不正解 誤り: 20代女性 「嫌悪」 ↔ 「怒り」 40代男性 「怒り」 → 「嫌悪」 40代女性 「嫌悪」 → 「怒り」 ↓ 特徴/台詞を確認し、「幸福」を除く3感情の弁別課題 3回実施/後半2回連続正解 誤り: 40代男性 「怒り」 → 「悲しみ」 ★後半2回は「台詞を言いながら」分類 → 正解 6-4: 1回実施/不正解 誤り: 20代男性 「悲しみ」 → 「怒り」			
← 5回目 →					← 6回目 →			

4感情の表情識別訓練②				4感情の表情識別訓練③			
復習1	復習2	6-4	般化	復習1	復習2	6-4	般化
合言葉	特徴の 確認	「幸福」「悲しみ」 「怒り」「嫌悪」 の弁別課題	プロトタイプ 写真の弁別課題	合言葉	特徴の 確認	「幸福」「悲しみ」 「怒り」「嫌悪」 の弁別課題	プロトタイプ 写真の弁別課題
○	○	△	○	○	△	△	—
6-4: 3回実施/不正解 誤り: 20代男性 「嫌悪」 → 「怒り」 2回 「悲しみ」 → 「嫌悪」 1回 40代男性 「嫌悪」 → 「悲しみ」 1回 ↓ 台詞を言いながら、「幸福」を除く、3感情の弁別課題 2回実施/2回連続正解 般化: 1回実施/不正解 誤り: 20代男性 「悲しみ」 → 「嫌悪」 ↓ 台詞を言いながら、「幸福」を除く、3感情の弁別課題 (プロトタイプ写真を含む) 2回実施/2回正解 <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> 訓練終了基準には達していないが、回数の制約のため、次回、ビデオによる評価となる。 </div>				復習2 (特徴/台詞): 「嫌悪」の台詞が思い出せなかった 6-4: 1回実施/不正解 誤り: 20代男性 「悲しみ」 ↔ 「嫌悪」 ↓ 「幸福」を除く、3感情の弁別課題 3回実施/1回正解 誤り: 40代女性 「嫌悪」 → 「怒り」 2回 ↓ 6-4: 1回実施/正解 <div style="border: 1px dashed black; padding: 10px; text-align: center; margin-top: 10px;"> ビデオによる評価 </div>			
← 7回目 →				← 8回目 →			

(1) 写真による訓練課題の達成度

写真を用いた訓練では、「幸福」「悲しみ」「怒り」「嫌悪」の4感情の識別が十分に達成されたとはいえない。しかしながら、訓練に用いなかった人物に対する般化の課題では正しく感情が識別できるなど、より一般的な場面にも対応できる可能性が示唆された。

(2) 訓練効果

写真を用いた訓練終了後の評価では、正答率・混同の傾向ともに改善が認められた(表2-2-5)。特に、いずれの条件でも【快-不快】の混同が解消されたことは、日常生活場面での困難を減じると考えられる。

「表情のみ」においては、「悲しみ」「怒り」「嫌悪」の3感情について、一部で混同が認められたものの、正答率において、健常者平均とほぼ同程度であり、訓練の目的は達成されたと考えられる。

(3) 訓練過程での態度と今後の課題

人と視線を合わせることが得意ではなかった(苦手というよりは、合わせようという意欲が感じられない)。また、訓練中、場面とは全く関係のない発言、例えば「お兄さんと同じ学校にいたので、ジャージがオレンジです」なども認められた。さらに、訓練の途中でもあくびをするなど、状況に対する理解が十分ではなく、周囲に対する配慮に欠けた行動も認められた。ただし、「職場であくびするのは良くないよね?」という問いかけには、「ため息のふりをします。そうすると『この人悩んでいるな』と思ってもらえるから」といった『他人の目』を気にする言動も認められた。なお、他の訓練生では抵抗の大きい「自分の顔を鏡でみて表情を作る」課題では特に抵抗は認められなかった。

こちら側の声掛け「台詞をもっと速く言おう」などには反応が見られなかったが、「〇〇秒でできたね。今度はもっと速くやってみよう」や「シールをたくさん貼ってもらおう」といった目に見える形で成果が評価される事態に対しては、意欲を見せて、速く反応できた。

また、6回目では「(相手が)怒っていきそうだったら、怒ってますかって聞いた方がいいですか」などの発言が認められ、「相手の気持ち」に配慮しようという構えが認められるようになった。

訓練終了が近づくにつれて「わかった」「もう、大丈夫。全部わかったよ」等の発言が見られるようになった。ビデオによる評価の際も、同様の発言が認められ、本人が訓練によって表情の識別が可能になったと考えていることがわかる。実際には混乱の認められる部分も若干残っているが、最終評価の成績からみて、こうした評価は現時点では、ほぼ妥当であるといえる。

今後の課題としては、『表現がストレートで配慮に欠ける』『指導中でも話を途中で遮って、勝手なことを話し出す』『自分のしていることを途中で遮られると強い不快感を示す』などの表出の問題の改善が挙げられる。本事例では、「受信」の問題は改善され、また、「相手の気持ち」に配慮しようという構えが認められるようになったが、そのことは、他者の表情をキー(きっかけ)として、自らの発言や行動をコントロールするというスキルの獲得に直接的には結びつかなかった。こうしたことから、「他者の気持ち」と「自らの行動の結果」との関係性を理解するためのプログラムを開発することの必要性が示唆されたといえる。

1-4. 訓練対象者：D氏（19歳男性）知的障害（軽度）

訓練前のコミュニケーションのタイプは「相補型（「音声のみ」「表情のみ」の単独の情報では正答率が低いものの、両方からの情報を相互補完的に利用することで、全体的な正答率が高まる）」であり、「表情」からの他者感情の識別が改善されることで、「音声+表情」にも改善が期待される事例。

表2-2-6 訓練前後の正答率及び混同傾向の変化

		【 訓練前 】					【 訓練後 】				
音声のみ	呈示された	回答（正答率 50.0%）				呈示された	回答（正答率 72.0%）				
	音声	幸福	悲しみ	怒り	嫌悪	音声	幸福	悲しみ	怒り	嫌悪	
	幸福	7			1	幸福	5			3	
	悲しみ		5	1	2	悲しみ	1	7			
	怒り			4	4	怒り			8		
嫌悪	4	3	1		嫌悪	2	3		3		
表情のみ	呈示された	回答（正答率 59.0%）				呈示された	回答（正答率 72.0%）				
	表情	幸福	悲しみ	怒り	嫌悪	表情	幸福	悲しみ	怒り	嫌悪	
	幸福	8				幸福	8				
	悲しみ		3		5	悲しみ		6		2	
	怒り		2	5	1	怒り		2	6		
嫌悪		1	4	3	嫌悪			5	3		
音声+表情	呈示された	回答（正答率 75.0%）				呈示された	回答（正答率 78.0%）				
	音声+表情	幸福	悲しみ	怒り	嫌悪	音声+表情	幸福	悲しみ	怒り	嫌悪	
	幸福	8				幸福	8				
	悲しみ	2	4	1	1	悲しみ		6		2	
	怒り		1	7		怒り			7	1	
嫌悪		2	1	5	嫌悪		1	3	4		

◆正答率：「音声のみ」では著しく低い。「表情のみ」「音声+表情」においてはいずれも低い。
 ◆混同：「音声のみ」「音声+表情」において【快-不快】の混同が認めらる。

◆正答率：「音声のみ」「表情のみ」「音声+表情」のいずれの条件においてもやや低い程度。
 ◆混同：「音声のみ」において【快-不快】の混同が認められる。

D氏		「幸福」の表情識別訓練				
		1	2	3-1	3-2	3-3
<p>◆視知覚： フロスティック視知覚発達検査の結果、課題Ⅰ（目と手の協応）及び課題Ⅲ（形の恒常性：異なった大きさや輪郭線の濃淡などにまどわされず、特定の図形を探す課題）において困難が認められた。</p> <p>◆コミュニケーションのタイプ 相補型</p> <p>◆訓練の必要性 タイプK／訓練可能性 やや困難</p> <p>◆感情の理解 「怒り」と「嫌悪」の違いについてはあまり分化していないが、基本的に感情を表す4つの言葉（嬉しい・悲しい・怒っている・嫌だ）とそれぞれの感情を感じる場面についての対応は了解可能である。</p>	顔の要素	合言葉	特徴 表情を作る	自己教示 (外顕)	自己教示 (内潜)	
	△	○	△ ○	○	△	
	眉・目・口		3-1（特徴）：口（口が開いている）			
			<p>【2回目】</p> <p>3-3 台詞は言えているようだが、写真をしっかりと見ることができない → 『人の顔を見るのは苦手です』</p>			
		← 1回目 →				

復習		「悲しみ」の表情識別訓練				復習		「怒り」の表情識別訓練						
		4-1	4-2	4-3	4-4			5-1	5-2	5-3	5-4			
合言葉	特徴の確認	顔の要素	表情を作る	自己教示 (外顕)	自己教示 (内潜)	「幸福」「悲しみ」 弁別課題	合言葉	特徴の確認	顔の要素	表情を作る	自己教示 (外顕)	自己教示 (内潜)	「幸福」「悲しみ」「怒り」 弁別課題	
×	△	△	×	△注	△	△	○	△	×	注	○			
								○	△	-	-	○	○	○
<p>復習（特徴）：「歯」→「鼻」と回答 4-1（要素）：「目」と回答 （表情）：「今は、悲しい顔はできないんです」と拒否</p> <p>4-2：注）台詞カードを伏せると、台詞が少しずつ変わってしまうが、内容的には適切</p> <p>4-3 特徴を指で示すことはできるが、不必要な個所まで指してしまうため、混乱している様子</p> <p>4-4：2回実施／連続正解 （この時点で確認したところ、台詞は正確）</p> <p>◆時間的な余裕があったので、「怒り」の表情識別訓練に進んだ</p>						<p>5-1：眉と目と口（しわを指摘するときもある） 特に、眉については「眉が上」を挙げた 注）「怒っている顔を見るのは嫌です」と拒否</p> <p>【3回目】</p> <p>復習（特徴） 「幸福」「怒り」→ OK 「悲しみ」→「眉に山」が「眉が下」へ</p> <p>◆「眉に山」→「眉が下」の誤りが多いため、 ここから、「眉が下」に変更</p> <p>5-4：2回実施／連続正解 台詞の暗唱もOK</p>								
← 2回目 →						← 3回目 →								

(1) 写真による訓練課題の達成度

写真を用いた訓練では、「幸福」「悲しみ」「怒り」「嫌悪」の4感情の識別が十分に達成されたとはいえない。しかしながら、訓練に用いなかった人物に対する般化の課題では正しく感情が識別できるなど、より一般的な場面にも対応できる可能性が示唆された。

(2) 訓練効果

写真を用いた訓練終了後の評価では、正答率・混同の傾向ともに改善が認められた(表2-2-6)。特に、「表情のみ」「音声+表情」において、【快-不快】の混同が解消されたことは、日常生活場面での困難を減じると考えられる。ただし、「悲しみ」「怒り」「嫌悪」の3感情間で一部に混同が残ったことから、さらに訓練を続けることが必要といえる。

(3) 訓練過程の態度と今後の課題

D氏の場合、相手の顔(表情)を見るのが苦手で、訓練者ともなかなか目を合わすことができなかった。この傾向については最後まで変わらず、「人の顔を見るのは嫌いです」「鏡を見るのは苦手です。毎日、顔を隠して歩いています」「写真を見るのは嫌いだから、疲れます」という発言が続いた。実際、鏡で自分の顔を見ながら表情を作る課題に対する抵抗は大きかった。特に不快な(怒りや嫌悪)表情の場合、この抵抗はさらに大きくなった。

また、「怒り」と「嫌悪」については、認知や表出を避ける傾向(そういう感情のあることをなるべくなら認めたくない/そういう感情はなるべくなら表に出したくない)が認められた。話をするときでも下を向いていることが多く、ときどきちらっと相手の顔を窺う仕草がみられた。また、課題が難しく、混乱してくると顔や口の周りに手をやる仕草が多くみられた(ただし、課題の遂行そのものに支障はなかった)。こちらの問いかけに対しては、「はい」というが、必ずしも了解しているわけではなく、またその数も相づちに近いほど多い。訓練の前半はこうした自信のない態度が続いた。

しかしながら、訓練5回目からは、自ら発言するなどの行動が見られ、受容されていると感じた場面では、少しずつだが自分の考えを表現できるようになった。台詞の変更(「眉が上がって」よりも、「眉が上」の方が覚えやすい など)を自ら申し出るなど、訓練課題を達成したいという気持ちは表現されたが、不快な表情写真をみることにに対する拒否は変わらず大きかった。また、訓練後半に発話が増えたことから、訓練当初に認められた言葉数の少なさ、緊張によるものと解釈できる。

訓練の目的については、『「怒っている顔」を見るのは嫌だけれど、どうして顔を見なくてはいけないのか』という問いに、「いろいろな感情が分かる」と回答する(4回目)など、理解している様子が伺えた。ただし、「(相手が)怒っていることがわかったらどうするか」という問いについては「顔を伏せる」「目線をそらす」と回答するなど、嫌な場面からは逃避することによって、その場をやり過ぎそうとする方略が認められた。このため、指導として、「謝ること」も必要であること、「理由を尋ねる」などの行動も時には必要となること(なぜ、怒られているのか、理由がまったく分からないときなど)を説明し、了解を得た。

(4) 訓練方法について

①台詞の変更：簡単な指示の理解は十分に可能であるが、短い訓練用の台詞を数回で確実に覚えることは難しい。また「まゆがあがって」を「まゆがうえ」などのように自分なりの言葉（本人が覚えやすい）に変えて使用する場合があるが、この変更を受け入れると訓練効果は大きい。反対に、無理に直そうとしたり、訓練者が相手と同じ言葉を使用しないと混乱し、緊張が高くなる。

②感情の理解：「悲しみ」の特徴である「泣きそうだ」が覚えられないため、「悲しい」場面・泣く場面について話しあう。本人の発言にあった、『悲しいドラマでは泣いてしまいます』という日常生活の経験と結びつけることで改善が認められた。

本事例は、訓練方法について、対象者ひとり一人にあわせた柔軟な対応の必要性をあらためて示唆した事例といえる。D氏においては、①台詞の変更を受け入れること、②台詞を対象者にとって意味のある（ここでは経験と結びつけた）ものとして理解させるための時間を設ける、などが求められた。

2-1. 訓練対象者：E（17歳男性）知的障害（軽度）／軽度の自閉傾向

訓練前のコミュニケーションのタイプは特定の型に分類されなかった。「低受信型」ではないものの、「音声のみ」「表情のみ」「音声+表情」のいずれの条件においても、正答率は低く、【快-不快】の混同も認められた事例。

表2-2-7 訓練前後の正答率及び混同傾向の変化

		【 訓練前 】					【 訓練後 】				
音声のみ	呈示された	回答（正答率 66.0%）				呈示された	回答（正答率 66.0%）				
	音声	幸福	悲しみ	怒り	嫌悪	音声	幸福	悲しみ	怒り	嫌悪	
	幸福	6	2			幸福	6	1		1	
	悲しみ		8			悲しみ		8			
	怒り			6	2	怒り			5	3	
嫌悪		3	4	1	嫌悪		5	1	2		
表情のみ	呈示された	回答（正答率 63.0%）				呈示された	回答（正答率 81.0%）				
	表情	幸福	悲しみ	怒り	嫌悪	表情	幸福	悲しみ	怒り	嫌悪	
	幸福	8				幸福	8				
	悲しみ	1	2	3	2	悲しみ		3	1	4	
	怒り		2	6		怒り		1	7		
嫌悪		2	2	4	嫌悪				8		
音声+表情	呈示された	回答（正答率 75.0%）				呈示された	回答（正答率 91.0%）				
	音声+表情	幸福	悲しみ	怒り	嫌悪	音声+表情	幸福	悲しみ	怒り	嫌悪	
	幸福	8				幸福	8				
	悲しみ	1	5	2		悲しみ		6		2	
	怒り			8		怒り			7	1	
嫌悪		2	3	3	嫌悪				8		

◆正答率：「音声のみ」「表情のみ」「音声+表情」のいずれの条件においても低い。
 ◆混同：「音声のみ」「表情のみ」「音声+表情」のいずれの条件においても【快-不快】の混同が認められる。

◆正答率：「音声のみ」では低いものの、「表情のみ」「音声+表情」においては健常者平均とほぼ同程度。
 ◆混同：「音声のみ」において【快-不快】混同が認められた。
 「表情のみ」においては「悲しみ」「怒り」「嫌悪」の3感情間で一部に混同が認められるものの、「音声+表情」の正答率も健常者平均とほぼ同程度であり、大きな問題は認められない。

E氏：		「幸福」の表情識別訓練				
		1	2	3-1	3-2	3-3
<p>◆視知覚 特に困難を認めない</p> <p>◆コミュニケーションのタイプ 特定の型に分類されない</p> <p>◆訓練の必要性 タイプK／訓練可能性：あり</p> <p>◆感情の理解 「感情から場面を想起する課題」では、『嬉しいとき』『怒るとき』以外の2感情について記述することができなかった。 また、「場面から感情を想起する課題」では、『自分が』悪いことをして叱られたときに『怒る』、『仕事に集中しているときに話しかけられたり、さわられたり、邪魔されたとき』には『嬉しい』と回答するなど適切でない選択が認められた。このため、状況と情動との関係が必ずしも適切に理解されているとは考えがたい。</p>	顔の要素	合言葉	特徴	表情を作る	自己教示 (外顕)	自己教示 (内潜)
	「目と口」	○	×	○	○	
	「表情の特徴は主として『目つき』に表れる」という認識を持っている。				△	○
			<p>3-1 (特徴)：目つき</p> <p>【2回目】</p> <p>3-2：「顔を見よう」→「目を見よう」に変化 台詞が一部入れ替わることがある 例：「口で鼻の脇にしわ」 ↓ 繰り返し復唱。正確に4回繰り返せたことを確認して、(内潜)へ</p>			
		← 1回目			← 2回目	

復習		「悲しみ」の表情識別訓練				復習		「怒り」の表情識別訓練					
		4-1	4-2	4-3	4-4			5-1	5-2	5-3	5-4		
合言葉	特徴の確認	顔の要素	表情を作る	自己教示 (外顕)	自己教示 (内潜)	「幸福」「悲しみ」 弁別課題	合言葉	特徴の確認	顔の要素	表情を作る	自己教示 (外顕)	自己教示 (内潜)	「幸福」「悲しみ」「怒り」 弁別課題
×	×	△	△	○	○	○			△	○	○	○	○
		○		○	○	-	△	△	△	○	○	○	○
<p>復習 (合言葉)：「まめはし」／「眉」→「耳」となる 復習 (特徴)：目つき</p> <p>4-1 (要素)：「目」と回答 (表情)：鏡を見ることはできたが、表情を作ること はできなかった</p> <p>4-4：4回実施／4回連続正解</p> <p>★「悲しみ」の台詞には誤りは認められない。これに対し、「幸福」の台詞では、「口が奥でしわの下」「口が奥でしわの脇にしわ」「口がわきで鼻の奥にしわ」と台詞が一部入れ替わることがあった</p>						<p>復習 (合言葉)：「は」→「歯」／「し」→指紋 復習 (特徴)：「幸福」→OK 「悲しみ」→思い出せなかった</p> <p>4-3/4-4：復習をする →OK</p> <p>5-4：3回実施／3回連続正解</p>							
← 2回目						← 3回目							

「嫌悪」の表情識別訓練					4感情の表情識別訓練①			
復習	6-1	6-2	6-3	6-4	復習1	復習2	6-4	般化
合言葉 特徴の確認	顔の要素 表情を作る	自己教示 (外顕)	自己教示 (内潜)	「幸福」 「悲しみ」 「怒り」 「嫌悪」 弁別課題	合言葉	特徴の確認 台詞の確認	「幸福」「悲しみ」 「怒り」「嫌悪」 の弁別課題	プロトタイプ写真 の弁別課題
○ -	△ ○	△	○	△	○	△	○	○
5-4: 2回実施/2回連続正解 6-1: 「目つき」/最悪の顔です 6-2: 台詞が一部入れ替わることがあった 例: 「眉があがって、鼻が細い」 6-4: 3回実施/2回正解 誤り: 20代男性 「嫌悪」 → 「悲しみ」					復習2 (特徴/台詞): 「幸福」「悲しみ」「怒り」→OK 「嫌悪」→× (笑っている?/眉があがって鼻...) 6-4: 2回実施/2回連続正解 般化: 2回実施/1回正解 誤り: 「嫌悪」 ↔ 「悲しみ」 プロトタイプ写真を含めた20枚の弁別 3回実施/3回連続正解			
← 4回目 →					← 5回目 →			

「写真による訓練」の修了基準に達したと考えられる。
このため、次回、ビデオ訓練とする

4感情の表情識別訓練②				ビデオによる訓練		
復習1	復習2	6-4	般化	復習1	復習2	「ビデオによる訓練」
合言葉	特徴の確認 台詞の確認	「幸福」「悲しみ」 「怒り」「嫌悪」 の弁別課題	プロトタイプ 写真の弁別課題	合言葉	特徴の確認 台詞の確認	
○	-	△	-	○	-	
6-4: 1回実施/不正解 誤り: 20代男性の「嫌悪」を悩んで分類できなかった 4-4: 1回実施/1回正解 ★写真の人物とビデオの人物が同一人物であることに気づかなかった。				★「ビデオによる訓練」では、「なにを言っているか」に気をとられてしまい、表情の特徴に意識を集中させることができなかった。 ★ビデオの映像を止めると正解になる。		
← 6回目 →				← 7回目 →		

4感情の表情識別訓練④			
復習1	復習2	6-4	般化
合言葉	特徴の確認 台詞の確認	「幸福」「悲しみ」 「怒り」「嫌悪」 の弁別課題	プロトタイプ 写真の弁別課題
○	△	20枚の弁別課題	
復習2 (特徴/台詞): 「幸福」「悲しみ」「怒り」→OK 「嫌悪」→「鼻に横しわ」が思い出せなかった。			
ビデオによる評価			
← 8回目 →			

(1) 写真による訓練課題の達成度

写真を用いた訓練では、「幸福」「悲しみ」「怒り」「嫌悪」の4感情の識別が可能となった。また、訓練に用いなかった人物に対する般化の課題でも正しく感情が識別できるなど、より一般的な場面にも対応できる可能性が示唆された。

(2) 訓練効果

写真を用いた訓練終了後の評価では、正答率・混同の傾向ともに改善が認められた(表2-2-7)。特に、「表情のみ」「音声+表情」において、【快-不快】の混同が解消されたことは、日常生活場面での困難を減じると考えられる。

ただし、「悲しみ」を「嫌悪」と捉える傾向が残ったことから、さらに訓練を続けることが必要といえる。

(3) 訓練への取り組みと今後の課題

E氏においては、訓練そのものへの取り組みにおいていくつかの困難が認められた。具体的には、①訓練場面とは関係のない質問をする、②あくびや体を頻繁に揺するなどである。そこで、まず、これらに問題についてまとめ、その後、E氏における今後の課題を検討する。

①「質問」について

訓練場面において、適切でない場面での関係のない質問が目立った。主たる質問は、訓練担当者及び表情刺激写真の人物に関する「名前」「住所」「血液型」などである。これらについては「質問せずにいること」はかなり困難であった。課題に関係なく、突然発せられる質問については、『何となく知りたい』『知りたいことを一通り知ると落ち着く』という。しかし「この時間は質問はしないように」と指示すると、短期間であれば、質問せずにいられる(『30分は、質問をしない』との約束をするが、確認を10分ごとに行う必要がある)。

また、質問をしないでも、質問は「頭の中」に存在しているため、目の前の課題に集中できないことがある。しかし、本人はいろんな質問を考えていることについて『作業をしているとき(ハンダゴテを使用している時など)でも、手元を見ながらちゃんとできる。この課題(表情識別訓練プログラム)もできる』という。また、『これは、きれいごとでいっているのではない(本当にできるのだ)』ということを強調していた。これに対し、準備訓練では、「作業に集中していないことがある」と指摘されており、本人の認識とは異なっていた。

②行動面の問題(あくび/体を揺するなど)

訓練場面において、「あくび」「体を揺する」「鼻を鳴らす」などの行動が目立った。特に、質問を禁止するとこの行動は激しくなる。1つ1つは日常生活の中で比較的に見られる行動だが、遠慮がなく、回数が多いため、不自然に思われる。あくびについては指摘したが、『特別に眠いというわけではない』という。

ビデオ訓練(8回目)になると回答中の質問は減ったが、大あくび、貧乏揺すり、目が半眼になって反応が遅れる、などの行動が目立つようになる。このため、最後の10分間は、常に回答を口頭で言う

ように指示した。しかし、この時点でも、反応の遅れがやや目立った。

①②のような問題はありますが、訓練そのものについては拒否的ではなく、自ら訓練の方法について提案すること（『「悲しみ」と「嫌悪」だけでやりたい』『うまくできたらどんどん増やしていきたい』など）もあり、積極的な姿勢が見られた。

③今後の課題：表情の識別と行動のコントロール

E氏においては、相手の表情を理解することと、そのことによって自分の行動をコントロールすることの関係については、まだ、十分に理解されているとはいえない。

たとえば、『表情から相手が「怒っている」あるいは「嫌だな」と思っていることがわかったらどうしますか』という質問に対しては、回答が得られなかった。ただし、「怒られたとき」には謝るのですが、なんと謝りますか？ という質問に対しては、『すみません』と回答した。

一方で 『「笑顔」でいる方が仕事ができるように見える』等の発言がみられるように、表情が他者に与える影響については、認識していると考えられる。

これらに加えて、E氏においては、他者の表情を見るという構え、他者の気持ちに配慮するという構えが十分ではないため、この点について、今後も指導と配慮が必要である。また、対人関係の問題は、言語的な問題だけでなく行動的な面も含めて表出にもあると考えられるため、これらにも同様に指導と配慮が必要であろう。

本事例は、訓練の「課題達成」ではなく、「取り組む姿勢」に困難のある事例といえる。こうした事例では、対象者の行動特性に配慮したプログラムの試行が求められる。また、訓練遂行上、問題となる行動については修正を必要とするが、訓練遂行上、特に問題とならない行動については、当該、訓練プログラムの中では指導しないなど、訓練の目的に即して、対象者に応じた柔軟な対応の必要性が求められている。

2-2. 訓練対象者：F氏（22歳男性） 知的障害（軽度）／療育手帳：申請中

訓練前のコミュニケーションのタイプは特定の型に分類されなかった。「低受信型」ではないものの、「表情のみ」「音声+表情」のいずれの条件においても、正答率は低く、「表情のみ」においては【快-不快】の混同も認められた。また、「表情のみ」「音声+表情」では『悲しみ』を『怒り』や『嫌悪』と捉える傾向が指摘できる。

表2-2-8 訓練前後の正答率及び混同傾向の変化

		【 訓練前 】					【 訓練後 】				
音声のみ	呈示された	回答（正答率 75.0%）				呈示された	回答（正答率 72.0%）				
	音声	幸福	悲しみ	怒り	嫌悪	音声	幸福	悲しみ	怒り	嫌悪	
	幸福	8				幸福	8				
	悲しみ	1	6		1	悲しみ		8			
	怒り	1		6	1	怒り		1	7		
嫌悪		3	1	4	嫌悪		7	1			
表情のみ	呈示された	回答（正答率 66.0%）				呈示された	回答（正答率 81.0%）				
	表情	幸福	悲しみ	怒り	嫌悪	表情	幸福	悲しみ	怒り	嫌悪	
	幸福	7			1	幸福	8				
	悲しみ	1	1	2	4	悲しみ	1	6	1		
	怒り			8		怒り			6	2	
嫌悪			3	5	嫌悪			2	6		
音声+表情	呈示された	回答（正答率 75.0%）				呈示された	回答（正答率 91.0%）				
	音声+表情	幸福	悲しみ	怒り	嫌悪	音声+表情	幸福	悲しみ	怒り	嫌悪	
	幸福	8				幸福	8				
	悲しみ		4	2	2	悲しみ		8			
	怒り			8		怒り			8		
嫌悪			4	4	嫌悪		1	2	5		

- ◆正答率：「音声のみ」においては、やや低い程度だが、「表情のみ」「音声+表情」においては低い。
- ◆混同：「音声のみ」「表情のみ」において【快-不快】の混同が認められる。

「表情のみ」「音声+表情」において、「悲しみ」を「怒り」または「嫌悪」と捉える傾向が認められる。

- ◆正答率：「音声のみ」においては、やや低いものの、「表情のみ」「音声+表情」においては健常者平均とほぼ同程度。
- ◆混同：「表情のみ」において【快-不快】混同が認められる。

網掛け以外の誤りは「表情のみ」「音声+表情」でも1~2であり、大きな問題は認められない。「悲しみ」を「怒り」または「嫌悪」と捉える傾向は改善された。

F氏：		「幸福」の表情識別訓練					
		1	2	3-1	3-2	3-3	
◆視知覚： フロスティック視知覚発達検査では、課題Ⅲ（形の恒常性：異なった大きさや輪郭線の濃淡などにまどわされず、特定の図形を探す課題）において困難が認められた。 ◆コミュニケーションのタイプ 特定の型に分類されない ◆訓練の必要性 タイプK／訓練可能性：やや困難 ◆感情の理解 特に問題は認められない	顔の要素	合言葉	特徴	表情を作る	自己教示 (外顕)	自己教示 (内潜)	
	×	○	△	—	○		
				×	○	○	
	「目と口」 「輪郭が微笑んでいる」 ☆「怒り」と「嫌悪」の違いについて ↓ 「嫌だなあ」の中に半分は「怒り」があって、たまると爆発するんだ ☆「人の気持ちを知りたいのは、ちょっとだけある」			3-1（特徴）：ほほから口の輪郭 【2回目】 3-1（表情）：鏡を見てはできない			
		← 1回目		← 2回目			

復習		「悲しみ」の表情識別訓練				復習		「怒り」の表情識別訓練					
		4-1	4-2	4-3	4-4			5-1	5-2	5-3	5-4		
合言葉	特徴の確認	顔の要素	表情を作る	自己教示 (外顕)	自己教示 (内潜)	「幸福」「悲しみ」 弁別課題	合言葉	特徴の確認	顔の要素	表情を作る	自己教示 (外顕)	自己教示 (内潜)	「幸福」「悲しみ」「怒り」 弁別課題
△	○	—	△	○	○	○	—	△	—	○注	△	○	○
合言葉：「は」→くち と回答 4-1（要素）：「嫌な顔」と回答したため、「嫌な顔」との比較をする ↓ 「違いは、目ですね。（悲しい方は）眉にやる気がないっていうか……」 4-1（表情）：鏡を見て表情を作ることはできない 4-4：3回実施／3回連続正解						【3回目】 5-1（要素）：「口」／「目」がにらんでいる 5-2：台詞は言えるが、台詞と同時に、写真の特徴を指さすことはできない。 5-4：2回実施／2回連続正解							
【3回目】 4-4：3回実施／3回連続正解						【4回目】 5-4：2回実施／2回連続正解							
		← 2回目		← 3回目									

		「嫌悪」の表情識別訓練				4感情の表情識別訓練①					
復習		6-1	6-2	6-3	6-4	復習1	復習2	6-4	般化		
合言葉	特徴の確認	顔の要素	表情を作る	自己教示 (外顕)	自己教示 (内潜)	「幸福」 「悲しみ」 「怒り」 「嫌悪」 弁別課題	合言葉	特徴の確認	台詞の確認	「幸福」「悲しみ」 「怒り」「嫌悪」 の弁別課題	プロトタイプ 写真の弁別課題
○	—	△	△	△	△	△	△	△	○		
<p>6-1 (要素): 「眉に力がある」「鼻にしわがある」 6-1 (表情): 鏡を見ることはできたが、適切な表情はうまく作れない 6-2: 「目が上がって」「鼻の脇にしわ」など他の感情の台詞が混じる 6-3: 動作で示す場面で、すべての特徴にさわれないことがある 6-4: 1回実施/不正解 誤り: 20代男性 「悲しみ」 → 「嫌悪」 40代女性 「嫌悪」 → 「幸福」 40代男性 「悲しみ」 ↔ 「嫌悪」</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>台詞カードを見ながら弁別 「悲しみ」「怒り」「嫌悪」の弁別課題 2回実施/1回正解 誤り: 20代男性 「悲しみ」 → 「嫌悪」</p>						<p>復習 (特徴/台詞): 「悲しみ」「怒り」 → OK 「幸福」 → × 「眉が上がって……」 「嫌悪」 → × 「鼻に横しわ」を思い出せなかった</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>台詞を言いながら、写真の特徴に触る</p> <p>6-4: 1回実施/不正解 誤り: 20代女性 「悲しみ」 → 「嫌悪」 20代男性 「悲しみ」 → 「嫌悪」 40代女性 「悲しみ」 → 「嫌悪」 40代男性 「悲しみ」 → 「嫌悪」</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>「悲しみ」「嫌悪」の弁別課題 1回実施/不正解 (40代男性)</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>台詞を言いながら分ける 1回実施/正解</p> <p>6-4: 1回実施/不正解 誤り: 20代男性 「悲しみ」 → 「嫌悪」</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>20代男性の「悲しみ」と「嫌悪」の弁別のみを繰り返す</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>20・40代男性の「悲しみ」と「嫌悪」の弁別のみを繰り返す 3回実施/3回連続正解</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>「悲しみ」「嫌悪」の弁別課題 ★ 「なんかだんだんわかってきた」との発言あり 1回実施/1回正解</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>「幸福」「悲しみ」「嫌悪」の弁別課題 1回実施/1回正解</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>6-4: 2回実施/2回連続正解</p> <p>プロトタイプ写真の弁別 → OK</p>					
← 4回目 →						← 5回目 →					

4感情の表情識別訓練②				ビデオによる訓練		
復習1	復習2	6-4	般化	復習1	復習2	「ビデオによる訓練」
合言葉	特徴の確認 台詞の確認	「幸福」「悲しみ」「怒り」「嫌悪」の弁別課題	プロトタイプ写真の弁別課題	合言葉	特徴の確認 台詞の確認	
○	—	○	○	○	—	△
<p>★本人から、訓練の進め方について、提案があった。 「最初は「悲しみ」と「嫌悪」だけでやりたい。うまくできたらどんどん増やしていくのがいい」</p> <p>「悲しみ」「嫌悪」の弁別課題 → 1回実施/正解 ↓ 「悲しみ」「怒り」「嫌悪」の弁別課題 → 1回実施/正解</p> <p>6-4：3回実施/後半2回連続正解 誤り：40代男性 「悲しみ」 → 「嫌悪」 ↓ プロトタイプ写真の弁別課題 2回実施/2回連続正解 ↓ プロトタイプ写真を含めた20枚の弁別 3回実施/3回連続正解</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 10px auto;"> <p>「写真による訓練」の修了基準に達したと考えられる。このため、次回、ビデオによる訓練とする</p> </div>				<p>★訓練前に16枚の写真を1枚ずつ確認した</p> <p>★実習先が、希望と違ってしまったため、ひどく落胆していた 「うまくいくのか」という不安を何度も口にしていた</p>		
← 6回目 →				← 7回目 →		

ビデオによる訓練			4感情の表情識別訓練④			
復習1	復習2	「ビデオによる訓練」	復習1	復習2	6-4	般化
合言葉	特徴の確認 台詞の確認		合言葉	特徴の確認 台詞の確認	「幸福」「悲しみ」「怒り」「嫌悪」の弁別課題	プロトタイプ写真の弁別課題
○	—	△	○	—	20枚の弁別課題	
<p>★前回、間違えたビデオの刺激を見て、確認をする ↓ プロトタイプ写真を含めた20枚の弁別 1回実施/正解</p> <p>★「眉と眉の間のしわ」こだわり、少しでもしわがあると「しわってここじゃないですか」と言う</p> <p>★「嫌悪」の表情の時、途中で目が大きくなる瞬間があることを指摘して、「目をかっと開けたから（怒りだと思った）」と言う</p> <p>★「よろこび」を「悲しみ」と判断したとき：「どうしても、眉と目見て判断しちゃうんだ」</p>			<p>プロトタイプ写真を含めた20枚の弁別 1回実施/不正解 誤り：40代男性 「悲しみ」 → 「嫌悪」 ↓ 40代男性のみの弁別 1回実施/正解</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 10px; width: fit-content; margin: 10px auto;"> <p>ビデオによる評価</p> </div>			
← 8回目 →			← 9回目 →			

(1) 写真による訓練課題の達成度

写真を用いた訓練では、「幸福」「悲しみ」「怒り」「嫌悪」の4感情の識別が可能となった。また、訓練に用いなかった人物に対する般化の課題でも正しく感情が識別できるなど、より一般的な場面にも対応できる可能性が示唆された。

(2) 訓練効果

写真を用いた訓練終了後の評価では、正答率・混同の傾向ともに改善が認められた(表2-2-8)。特に、「音声+表情」において【快-不快】の混同が解消されたこと、また、「表情のみ」「音声+表情」において、「悲しみ」を「嫌悪」と捉える傾向が改善されたことは、日常生活場面での困難を減じると考えられる。

(3) 訓練への取り組みと今後の課題

訓練当初は、緊張が高く、失敗を恐れる気持ちも強かった(12枚の弁別に入る前には、手をあわせて心を落ち着けようとするなどの行動が観察された)。しかし、訓練への取り組みそのものは積極的であった。実際、訓練の回数が進むに連れて、自ら発見したことを述べる、あるいは「もう一度この部分をやってみよう」等の発言がみられ、受容されていると感じた場面では、自分の考え等を表現できることがわかる。ただし、「失敗」「間違い」には過敏に反応するため、自信をもつことができるまでは、訓練での「成功の体験」を増やすなどの配慮が必要であった。後半のセッションでは、訓練に関して、具体的な提案をするようになり、最初に復習をしようという提案に対して、前回混同の多かった「悲しみ」と「怒り」についてやりたいと申し出ることができた(嬉しい・怒りは後で加えればよいとのこと)。その後、「怒り」を加えたいという申し出があり、最終的には16枚の識別が可能となった。また、プロトタイプを含めた20枚に増やす過程で、20代の女性の写真と30代女性(新しい刺激)を自発的に比較して似ていることを確認するなどの行動も認められた。このため、新しい課題に進む際には、本人の『わかってきた』『もう一度やりたい』などの発言を参考にした。理解のペースは通常よりも少し遅いが、一度理解できると、定着は良いと思われる。

訓練の中では、『相手が「怒っている」と分かると怯える』『「嫌だなあ」の中に半分は怒りがあって、たまると爆発する』『自分は「すぐにカッとなる方」で「嫌なことを言われるとすぐに表情にでてしまう』』という発言に代表されるように、「怒り」や「嫌悪」に対する発言は、「嬉しい」や「悲しい」と比較して多く見られた。また、自分が失敗したと感じたり、間違いを指摘されたりすると過剰に反応する傾向が見られた(黙ってしまう、言い訳やなぜ間違えたのかの説明をする等)。このことは、いじめが原因で高校を中退するなど、対人関係について不安が大きいこと、また、劣等感が強く、できることも時に「わかりません」と答えるといった態度と関連があると考えられ、こうした面についての精神的なサポートが今後の課題といえる。

この事例では、A氏の事例と同様に、獲得されたスキルを有効利用するために、別途、面接を含めた対人的な不安を解消するためのセッションの必要性が示唆された。

3. まとめ

表情識別訓練プログラムを通して、「表情のみ」において改善の認められた6事例のうち、5事例では当初、鏡を見て、自らの表情に注目することに抵抗が大きかった。また、日頃、「他者の表情を見ない」、あるいは「人の顔を見るのは苦手である」という発言も多く見られた。しかしながら、訓練を進めていく中で、次第に積極的に関与するような態度変容が認められた。こうした変容を可能とした背景要因として、自らの識別に自信を持てるようにプログラムの修正や変更を行ったことが挙げられる（必ず、成功場面でセッションを終了する、台詞を対象者に応じて変更する、など）。また、他者の表情を手がかりとすることで、より円滑な対人関係が得られるという訓練の目的を自らの課題として理解したことも挙げておきたい。

しかしながら、今回、表情識別訓練プログラムにより「受信」に関する問題に改善は認められたものの、①対人関係に対する不安の解消、並びに ②表出に関する問題の改善、が新たな課題としてクローズアップされてきた。こうした問題への対応のために、本事例では、別途、面接や行動特性に配慮した指導が必要となった。

これらの事例は、表情識別訓練プログラムによって獲得されたスキルをより有効に活用するためには、訓練と並行して、精神的な側面でのサポート並びに表出に関する社会的スキル訓練を導入することの必要性を示唆しているといえよう。

第4節 訓練効果を抑制する要因が明らかとなった群

— 対象者の新たな選択基準をめぐって —

ここでは、写真による訓練が終了した者（回数制限により、訓練で規定された基準を達成できなかった者を含む）のうち、「表情のみ」の呈示条件で10%以上の改善が認められなかった3名についての訓練の経過をまとめる。ただし、G氏については、「表情のみ」「音声+表情」において【快-不快】の混同に改善がみとめられ、I氏においては、「音声+表情」の正答率で改善が認められた。なお、H氏においては、正答率・【快-不快】の混同のいずれにおいても改善が認められなかった。以下に、その理由について検討する。

表2-2-9 表情識別訓練前後におけるF & T感情識別検査の結果（%）

	表情識別訓練プログラム 実施前			表情識別訓練プログラム 実施後		
	音声	表情	音声+表情	音声	表情	音声+表情
G	50	53	56	59	63	72
H	72	63	66	84	59	72
I	69	50	63	81	56	81

G氏・H氏はいずれも、感情毎の特徴を表す台詞を訓練期間内で十分に習得できなかった事例である。それにも関わらず、7回という訓練回数で評価に至った背景には、今回の訓練が他の訓練プログラムとの調整により、回数の制約があったことによる。したがって、両名のような場合については、さらに訓練回数を増やし、台詞についての十分な習得を得た後に再評価することで改善が認められるのかについて検討する必要があることはいうまでもない。

また、I氏については、台詞の習得に問題はなく、また視知覚の発達にも困難は認められなかったが、表情の細かい点にこだわりが強く、たとえば、一度「しわ」に注目すると、台詞とは関係なく「しわ」にだけ注目して判断するなどの行動が認められた。台詞に表される他の箇所にも注目するように促したが、7回の訓練の中ではこれらの行動は改善されなかった。したがって、I氏において改善が認められなかった主な理由の1つに、自閉症に固有の「こだわり」を挙げることができよう。なお、軽度の自閉傾向が認められる者は他にも3名おり、そのうち前節に記載したE氏においては、同様の傾向が若干認められた。しかし、特定の箇所にだけ注目して判断してしまうことに対して、自ら『どうしても眉と目だけ見て判断しちゃうんだ』と言うなど、そうした判断ではなく特徴のすべてに注目する必要があることについて理解していることが認められた。このことから、「こだわり」の程度が訓練効果に影響を及ぼしていると考えられる。

自閉的な傾向の認められる者については、第Ⅰ部第1章第2節で検討したように、訓練を受けずに8週間～10週間をおいて再評価する課題においても安定した結果が得られなかったこととあわせ、こうした訓練の対象者として適切かどうかを検討する必要があると考えられる。

以上の事例から、また、この訓練プログラムが言語による行動化を基礎としていることから、対象者の選択に関し、「台詞が暗唱できない（短期間の保持が難しい）」、もしくは、「台詞の一部にこだわりをもつ」ことの問題を検討することの必要性が明らかになったといえる。

1. 訓練対象者：G氏（18歳男性） 知的障害（中度）

表情の特徴を表す台詞を1週間（次の訓練までの期間）保持し続けることができず、写真課題の修了基準を達成できなかった事例

なお、訓練前の評価では、「音声のみ」「表情のみ」「音声+表情」のいずれにおいても【快-不快】の混同が認められ、しかも、混同の大半が不快（悲しみ・怒り・嫌悪）→快（幸福）であるため、日常生活における対人関係面での困難が予想された。また、「音声のみ」では半数を幸福と答え、「表情のみ」では半数を怒りと答えるといった偏った回答傾向も認められた。

表2-2-10 訓練前後の正答率及び混同傾向の変化

【訓練前】

【訓練後】

音声のみ	呈示された	回答（正答率 50.0%）				音声のみ	呈示された	回答（正答率 59.0%）			
	音声	幸福	悲しみ	怒り	嫌悪		音声	幸福	悲しみ	怒り	嫌悪
	幸福	7			1		幸福	7		1	
	悲しみ	2	4	1	1		悲しみ	1	6	1	
	怒り	2		5	1		怒り			6	2
嫌悪	5	2	1		嫌悪	3	4	1			
表情のみ	呈示された	回答（正答率 53.0%）				表情のみ	呈示された	回答（正答率 63.0%）			
	表情	幸福	悲しみ	怒り	嫌悪		表情	幸福	悲しみ	怒り	嫌悪
	幸福	8					幸福	8			
	悲しみ	2	1	3	2		悲しみ		3	2	2
	怒り			7	1		怒り		2	6	
嫌悪			7	1	嫌悪		1	4	3		
音声+表情	呈示された	回答（正答率 56.0%）				音声+表情	呈示された	回答（正答率 72.0%）			
	表情+音声	幸福	悲しみ	怒り	嫌悪		表情+音声	幸福	悲しみ	怒り	嫌悪
	幸福	8					幸福	8			
	悲しみ		2	2	4		悲しみ		4	3	1
	怒り	1		5	2		怒り			7	1
嫌悪	2		3	3	嫌悪			4	4		

- | | |
|--|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ◆正答率：「音声のみ」「音声+表情」のいずれにおいても著しく低い。また、「表情のみ」においては低い。 ◆混同：「音声のみ」「表情のみ」「音声+表情」のいずれの条件においても、【快-不快】の混同が認められる。 | <ul style="list-style-type: none"> ◆正答率：やや改善は認められたものの、「音声のみ」「表情のみ」「音声+表情」のいずれにも低い。 ◆混同：「音声のみ」においては【快-不快】の混同が認められるが、「表情のみ」「表情+音声」においては【快-不快】混同は認められない。 |
|--|---|

G氏		「幸福」の表情識別訓練				
		1	2	3-1	3-2	3-3
<p>◆視知覚：フロスティック視知覚発達検査において著しい困難の認められる課題はなかったが、課題Ⅲ（形の恒常性：異なった大きさや輪郭線の濃淡などにまどわされず、特定の図形を探す課題）において若干の困難（知覚年齢6歳台）が認められた。</p> <p>◆コミュニケーションのタイプ 低受信型</p> <p>◆訓練可能性 タイプ L / 訓練可能性あり</p> <p>◆感情の理解：4感情のいずれについても自発的な回答を得ることはできなかった。場面を呈示して答えさせる課題でも、「悲しいことはない」「怒ることはない。怒るかなあ？」など、明確に確認することが困難であった。</p>	顔の要素	合言葉	特徴	表情を作る	自己教示 (外頭)	自己教示 (内潜)
	△	○	△	○		
		△	△	△	△	△
	「目・鼻・口」		3-1: 「目・鼻・口」			
	4感情のいずれの感情についても、その気持ちを経験した場面について、自発的な回答が得られなかった。各感情語を理解しているかを確認するために、訓練時間の半分を費やすこととなった		<p>【2回目】 合言葉：各要素は4つ正解 1つは、「しわ」→「耳」となる →合言葉の確認をする →訓練の最後でも「めであくしゅ」と変化</p> <p>3-2：台詞を読むのが難しく、台詞カードに集中すると表情写真を見ることができない ↓ 訓練者が繰り返し読み上げ、続いて同じように繰り返しさせた</p> <p>3-3：特徴をすべて指すことができない（口もしくは鼻わきのしわのいずれかしか指せない）</p>			
			<p>【3回目】 合言葉：「めではくしょん」となる 3-2/3-3：カードがない状態では、台詞に誤りがある 例：「顔の奥にしわ」</p>			
	← 1回目		← 2回目			

「悲しみ」の表情識別訓練					「怒り」の表情識別訓練				
復習	4-1	4-2	4-3	4-4	復習	5-1	5-2	5-3	5-4
合言葉 特徴の確認	顔の要素 表情を作る	自己教示 (外頭)	自己教示 (内潜)	「幸福」「悲しみ」 弁別課題	合言葉 特徴の確認	顔の要素 表情を作る	自己教示 (外頭)	自己教示 (内潜)	「幸福」「悲しみ」「怒り」 弁別課題
— ○	△ —	△ △	— —	△ ○注	— △ ○	△ — △	— △ —	△ △ —	△ △ △
<p>【3回目】 4-1: 「幸福」と「悲しみ」の違いについて →眉と目と口を指す 4-2: カードを見ながらなら正確に台詞が言える 4-4: 1回正解</p>					<p>5-1: 「悲しみ」と「怒り」の違いについて →鼻と口と髪の毛を指す</p>				
<p>【4回目】 復習(要素): 「ま」→忘れた ★4-2: 台詞の変更: 「幸福」 → 「口としわ」 「悲しみ」 → 「眉が下、目が下」 4-4: 2回実施 / 2回正解 (注) 台詞は一部×</p>					<p>【5回目】 復習(合言葉): 「めではくしょん」となる (特徴): 指さし→OK / 台詞は× 5-4: 2回実施 / 2回連続正解 ↓ 台詞の確認 5-2: 台詞を短く変更したが、一部入れ替えが認められた 5-3: 特徴にさわることで確認 5-4★ 3感情を3枚(3名)ずつ、台詞とともに確認 組み合わせを変えてすべてのセットを行う → 台詞に混同が認められることがあるが、 分類は正解 5-4: 3回実施 / 1回正解 誤り: 40代男性 「悲しみ」 → 「怒り」 2回 「怒り」 → 「悲しみ」</p>				
← 3回目					← 4回目				
					← 5回目				
					← 6回目				

「嫌悪」の表情識別訓練					4感情の表情識別訓練①				
復習	6-1	6-2	6-3	6-4	復習1	復習2	6-4	般化	
合言葉 特徴の 確認	顔の 要素	表情を 作る	自己 教示 (外顕)	自己 教示 (内潜)	「幸福」 「悲しみ」 「怒り」 「嫌悪」 弁別課題	合言葉 特徴の 確認	台詞の 確認	「幸福」「悲しみ」 「怒り」「嫌悪」 の弁別課題	プロトタイプ写真 の弁別課題
○	△	—	—	—	○	△	×	—	
復習（特徴）：特徴の確認は指さしによる 5-4：6回実施／一部迷うこともあるが6回連続正解 ★（注）台詞は× 「悲しみ」と「怒り」の特徴が一部 入れ替わっている 例：「悲しみ」肩が下・目がこわい ★5回目・6回目では台詞の混同は認められなかった					復習2（台詞）：「悲しみ」と「怒り」の台詞の一部に入れ 替えが認められる 5-4：2回実施／1回正解 誤り：40代女性 「怒り」 → 「悲しみ」 6-3：注）台詞を短く変更：「目が細くて、鼻にしわ」 復唱はOK 6-4：1回実施／不正解 誤り：20代男性 「嫌悪」 → 「怒り」 40代女性 「怒り」 → 「嫌悪」 ↓ 「怒り」と「嫌悪」の弁別 4回実施／後半2回連続正解 誤り：20代男性 「嫌悪」 → 「怒り」 2回 40代女性 「嫌悪」 → 「怒り」				
6回目					7回目				

4感情の表情識別訓練②				4感情の表情識別訓練③			
復習1	復習2	6-4	般化	復習1	復習2	6-4	般化
合言葉 特徴の 確認	台詞の 確認	「幸福」「悲しみ」 「怒り」「嫌悪」 の弁別課題	プロトタイプ 写真の弁別課題	合言葉 特徴の 確認	台詞の 確認	「幸福」「悲しみ」 「怒り」「嫌悪」 の弁別課題	プロトタイプ 写真の弁別課題
○	△	×	○				
復習2（台詞） 6-4：1回実施／不正解 誤り：20代男性 「嫌悪」 → 「悲しみ」 40代女性 「嫌悪」 → 「怒り」 ↓ 「悲しみ」「怒り」「嫌悪」の12枚の弁別 1回実施／不正解 誤り：20代男性 「嫌悪」 → 「悲しみ」 40代女性 「嫌悪」 → 「悲しみ」 40代男性 「怒り」 → 「嫌悪」 ↓ 特徴と台詞の確認後 「悲しみ」「怒り」「嫌悪」の12枚の弁別 4回実施／1回正解 誤り：20代男性 「嫌悪」 → 「悲しみ」 2回 40代女性 「嫌悪」 → 「悲しみ」 40代男性 「怒り」 → 「悲しみ」 ↓ プロトタイプ写真 OK 20枚の弁別 1回実施／不正解 20代男性 「嫌悪」 → 「悲しみ」 40代男性 「怒り」 → 「悲しみ」 ★8回目でも混同が多く認められ、訓練修了基準には 達しないまま、回数の制約により中止となった。				<div style="border: 2px dashed gray; padding: 10px; text-align: center;"> <p>訓練終了基準には達していないが、回数の制約の ために、ビデオによる評価となる</p> <p>ビデオによる評価</p> </div>			
8回目				9回目			

(1) 写真による訓練課題の達成度

写真を用いた訓練では、「幸福」「悲しみ」「怒り」「嫌悪」の4感情の識別が十分に達成されたとはいえない。

G氏の場合、合言葉がなかなか覚えられず（『まめでハクシオン』が『めでハクシオン』になってしまう：プログラム改訂の初期の過程で、合言葉は「まめはくし」ではなく「まめでハクシオン」を用いていた）、4回目でも『ま』を「目」や「しわ」のことと答えるなど十分な習得に至っていない。これに加えて、「表情の特徴を表す台詞」もなかなか覚えられず、混乱が認められた。具体的には、「口がよく（『奥』の間違え）」や「しわ（『鼻の横に』が抜けている）」といった単純な間違いに加え、「奥のわきのしわ」や「眉が上、目が下（怒りと悲しみの台詞の混同）」といった混乱も認められた。また、“思い出せない”ことも多かった。

訓練3回目～5回目でも特徴の「指さし」はできるが「台詞」に混乱が見られたため、4回目以降は台詞を覚えることの負荷を減ずるために以下のように単純化した。

「嬉しい」の特徴を『口としわ』とする 「悲しい」の特徴を『眉が下、目が下』とする 「怒り」の特徴を『眉が上、目がこわい』とする

しかし、訓練6回目～8回目でも特徴の「指さし」はできるが「台詞」が十分ではない。具体的には、復唱による繰り返りで、そのセッション内では台詞を言えるようになるが翌週まで保持できない、などが認められた。

しかしながら、訓練に用いなかった人物に対する般化の課題では正しく感情が識別できるなど、より一般的な場面に対応できる可能性は示唆された。

(2) 訓練効果

写真を用いた訓練終了後の評価では、「表情のみ」においては、正答率の改善は認められなかったが、【快－不快】の混同は解消された。また「音声＋表情」においては、正答率、【快－不快】の混同ともに改善が認められた（表2-2-10）。このことは、日常生活場面において最低限のトラブルを避けるという意味において重要な変化と考えられる。

(3) 訓練過程の変容と今後の課題

小学校・中学校でいじめられた経験があったためか、新しい場面では萎縮する傾向が認められた。他の準備訓練生との会話も乏しく、おどおどした態度が認められた。しかしながら、訓練後半では、職業準備訓練の場面でも積極的に他の訓練生との交流場面が認められ、また、視線を合わせて会話する場面が観察された。

この事例は、対象者によっては、課題を達成するためによりスモール・ステップの課題を用意することの必要性を示唆している。

2. 訓練対象者：H氏（22歳男性） 知的障害（中度）・身体障害（5級）

特徴を表す台詞について、十分な習得に至らなかった事例

訓練の前後において「音声のみ」「表情のみ」「音声+表情」のいずれにおいても【快-不快】の混同が認められた。また、「悲しみ」を「嫌悪」と捉える傾向が強い点が特徴である。

表2-2-11 訓練前後の正答率及び混同傾向の変化

【訓練前】

【訓練後】

	呈示された	回答（正答率 75.0%）				呈示された	回答（正答率 84.0%）			
		音声	幸福	悲しみ	怒り		嫌悪	音声	幸福	悲しみ
音声のみ	幸福	6			2	幸福	6			2
	悲しみ		5		3	悲しみ		7		1
	怒り			7	1	怒り			6	2
	嫌悪	1		1	6	嫌悪				8
	呈示された	回答（正答率 63.0%）				呈示された	回答（正答率 59.0%）			
		表情	幸福	悲しみ	怒り		嫌悪	表情	幸福	悲しみ
表情のみ	幸福	6			2	幸福	6	2		
	悲しみ		1	2	5	悲しみ		2		6
	怒り			8		怒り			5	3
	嫌悪			3	5	嫌悪		1	2	6
	呈示された	回答（正答率 66.0%）				呈示された	回答（正答率 72.0%）			
		表情+音声	幸福	悲しみ	怒り		嫌悪	表情+音声	幸福	悲しみ
音声+表情	幸福	6			2	幸福	7			1
	悲しみ		1		7	悲しみ		3		5
	怒り			8		怒り			5	3
	嫌悪			2	6	嫌悪				8

◆正答率：「音声のみ」においては、やや低い程度だが、「表情のみ」「音声+表情」においては低い。
 ◆混同：「音声のみ」「表情のみ」「音声+表情」のいずれの条件においても、【快-不快】の混同が認められる。
 また、「悲しみ」を「嫌悪」と捉える傾向も認められる

◆正答率：「音声のみ」においては、健常者平均とほぼ同程度だが、「表情のみ」「音声+表情」においては低い。
 ◆混同：「音声のみ」「表情のみ」「音声+表情」のいずれにおいても【快-不快】混同が認められる。
 また、「悲しみ」を「嫌悪」と捉える傾向も認められる。

H氏：		「幸福」の表情識別訓練				
		1	2	3-1	3-2	3-3
◆視知覚：フロスティック視知覚発達検査の結果、課題Ⅲ（形の恒常性：異なった大きさや輪郭線の濃淡などにまどわされず、特定の図形を探す課題）において困難が認められた。 ◆コミュニケーションのタイプ 特定の型に分類されない ◆訓練の必要性 タイプK / 訓練可能性：やや困難 ◆感情の理解： 特に困難は認められない	顔の要素	合言葉	特徴	表情を作る	自己教示（外顕）	自己教示（内潜）
	△	○	—	×	○	△
	「目・表情・口元」 「普段あまり人の顔は見ないが、人の顔を見るのは大切である」		3-1： 女性の前ではやらない / 鏡を伏せてしまう 写真に触る課題でも、「人前でやるのは苦手だ」としてなかなか手がでない。手に障害があること（身障手帳5級）を気にしている。 ↓ 訓練者と一緒にやることで解決 3-3： 特徴をさわることはできるが、台詞がでてこない ↓ カードを見ずに台詞が言えるようになった			
← 1回目 →						

「悲しみ」の表情識別訓練					「怒り」の表情識別訓練							
復習	4-1	4-2	4-3	4-4	復習	5-1	5-2	5-3	5-4			
合言葉 特徴の確認	顔の要素	表情を作る	自己教示（外顕）	自己教示（内潜）	「幸福」「悲しみ」 弁別課題	合言葉	特徴の確認	顔の要素	表情を作る	自己教示（外顕）	自己教示（内潜）	「幸福」「悲しみ」「怒り」 弁別課題
○ ○	○ △	○	○	○	△ ×	△ ○	○	○	○	○注		
4-1： 鏡を見ない状態でなら表情を作ることができた 4-4： 3回連続正解					4-4： 1回実施 / 正解 復習（合言葉）： 「は」 → 「歯」と誤る （特徴）： 「幸福」 × → 目が上、眉が下 「悲しみ」 × → 目が下、眉が上 ↓ 台詞の確認をする 5-1： 要素は「目：上がっている」と回答 5-4（注） 写真の弁別課題に混乱は認められなかったが、3感情の特徴を表す台詞については、混乱したままで終了となった。							
← 2回目 →					← 3回目 →							

「嫌悪」の表情識別訓練					4感情の表情識別訓練①					
復習	6-1	6-2	6-3	6-4	復習1	復習2	6-4	般化		
合言葉 特徴の確認	顔の要素	表情を作る	自己教示（外顕）	自己教示（内潜）	「幸福」「悲しみ」「怒り」「嫌悪」 弁別課題	合言葉	特徴の確認	台詞の確認	「幸福」「悲しみ」「怒り」「嫌悪」 の弁別課題	プロトタイプ 写真の弁別課題
△ △	— ○	○	○	△注	△	△	△			
5-4 → 1回：OK 復習（合言葉）： 「は」 → 「歯」と誤る （特徴）： 「幸福」 → 「鼻に横しわ」を忘れた 6-4： 3回実施 / 後半2回連続正解 誤り： 20代女性 「悲しみ」 → 「嫌悪」 注）台詞について尋ねると4感情間で一部に入れ替えが生じてしまう。					復習1（合言葉）： 「は」 → 「歯」と誤る 6-4： 6回実施 / 2回正解 誤り： 20代男性 「幸福」 → 「嫌悪」 2回 「悲しみ」 → 「嫌悪」 「嫌悪」 → 「怒り」 40代女性 「悲しみ」 → 「嫌悪」 2回 「怒り」 → 「嫌悪」					
← 4回目 →					← 5回目 →					

4感情の表情識別訓練②				4感情の表情識別訓練③			
復習1	復習2	6-4	般化	復習1	復習2	6-4	般化
合言葉	特徴の確認 台詞の確認	「幸福」「悲しみ」「怒り」「嫌悪」の弁別課題	プロトタイプ写真の弁別課題	合言葉	特徴の確認 台詞の確認	「幸福」「悲しみ」「怒り」「嫌悪」の弁別課題	プロトタイプ写真の弁別課題
○	△	△	○	○	△	△注	○
復習2（特徴/台詞）：「幸福」→「鼻に横しわ」と回答 「悲しみ」「怒り」「嫌悪」→OK 6-4 3回実施/後半2回悩みながらも連続正解 （回答に時間がかかる） 誤り：40代女性 「悲しみ」→「嫌悪」				復習2（特徴/台詞）：「幸福」→「鼻に横しわ」 「怒り」→「目が細くて」と回答 「悲しみ」「嫌悪」→OK 6-4 注）風邪で体調が悪いため、ビデオ評価の前に実施する課題の負荷を減らし、1回とした 1回実施/正解 <div style="border: 1px dashed gray; padding: 10px; margin: 10px 0;"> 訓練終了基準には達していないが、回数の制約のために、ビデオによる評価となる <p style="text-align: center;">ビデオによる評価</p> </div>			
6回目 →				← 7回目			

（1）写真による訓練課題の達成度

写真を用いた訓練では、「幸福」「悲しみ」「怒り」「嫌悪」の4感情の識別が十分に達成されたとはいえない。各表情の特徴を表す台詞の習得が不十分であり、たとえば、「嬉しい」の特徴（鼻の脇にしわ）と「嫌悪」の特徴（鼻に横しわ）を混同するなど、他の訓練対象者にはみられない誤りが認められた。また、訓練効果評価後、写真を用いて、それぞれの感情の特徴がどこに表れるのかをチェックさせたところ、「悲しい」と「嫌悪」の特徴を共に「鼻に横しわ」としてチェックするなど、表情から他者の感情を正確に識別できる力が十分に獲得されたとは言い難い。これらのことから、本対象者においては、さらに訓練を重ねる必要があったと考えられる。

また、本人からも最終評価時に「自分ではもっと勉強した方がいいと思います」との発言が見られ、まだ、十分に識別できていないことがことに対して自信のない様子が窺えた。しかしながら、訓練に用いなかった人物に対する般化の課題では正しく感情が識別できるなど、より一般的な場面に対応できる可能性は示唆された。

（2）訓練効果

写真を用いた訓練終了後の評価では、正答率・混同の傾向ともに改善が認められなかった（表2-2-11）。しかしながら、本対象者の場合、訓練プログラムの流れの中で構築されていた対人関係に対する積極的な姿勢が再検査の場面で必ずしも維持できなかった点に注意することが必要であろう。したがって、これらの結果を解釈する際には、以下の最終評価時における対象者の状態を考慮する必要があるであろう。

◆ 最終評価時の様子

職場実習に行った際、作業でミスを繰り返し、上司から厳しい注意を複数回にわたって受けたことに関わりしている様子で、仕事以外の様々なことに対しても非常に自信がなくなっていた。

また、訓練当日は平熱であったが、数日前から風邪をひいて前日には38度代の熱を出しており、だるそうな様子であった。

加えて、ビデオによる評価前に、突然、過去の「人と顔をあわせられなかった」経験について、話し始めるなど、写真ではなく、動く「顔」を見つめて課題に取り組むことに緊張が感じられた。

これらのことから、本事例のように、日常生活において、対象者が精神的に不安定な状態にある場合には、訓練プログラムを一時中断して、不安を聞き取るなどの精神的な側面を支援するセッションを設けること、また、訓練の再開の時期を慎重に選ぶことが重要であろう。

(3) 訓練過程での変容と今後の課題

H氏の場合、当初、鏡で自分の表情を見ることに対する抵抗が強く、また、「人の表情をみるのが苦手」であると発言していた。しかしながら、自ら「人の顔を見るのが大切だ」と発言するなど、問題意識は認められた。併せて、3回目では、訓練終了時に、「寮でも復習したいので、(台詞を)書いて持っていても良いか」「今、習ったの(台詞)をもう一度確かめたいけどいいですか」などの発言が認められた。

当初、鏡を見ることができなかったが、3回目くらいから、徐々に鏡が見られるようになってきた。また、悲しい出来事として「父が亡くなって……、2年前と手術のときと一緒にいて悲しかった」と「悲しい」感情を感じた場面について自発的に話すことができた。訓練前半では、「人の表情を見るのが嫌だ」とのぼしていた前髪を後半になって切ってくることができた。

また、H氏は、ビデオ評価ではいずれも、「怒り」「嫌悪」と回答する傾向が強く、「他者の否定的評価に対する不安」が高い可能性を指摘できる。このことは、準備訓練で指摘された『すぐに下を向いてしまい、他者の顔をまっすぐに見られない』『まじめだが、精神的な弱さがある。自信欠如が著しく、緊張が強い。些細なことでも動揺しやすく、注意を受けると飛び上がったり、後ずさったりする場面が見られる』という観察と一致している。

以上に加えて、他者の表情を見るという構えが未だ十分ではないため、その点について配慮が必要である。さらに、「必要以上に丁寧な言葉遣い」など、H氏の対人関係の問題は、表出面でも指摘されているため、この点についても同様に配慮が必要であろう。

3. 訓練対象者：I氏（23歳男性）知的障害（軽度）／強い自閉傾向が認められる

こだわりが強く、表情の特定箇所の特徴にとらわれて、混同が続いた事例。

このケースでは、対人的な問題、具体的には「挨拶の仕方」や「女性との距離の取り方」などが問題点として挙がっていた。このため、表情識別訓練と併せて、対人距離の取り方についても時間を設けた。

表2-2-12 訓練前後の正答率及び混同傾向の変化

【訓練前】

【訓練後】

	呈示された	回答（正答率 69.0%）				呈示された	回答（正答率 81.0%）			
		幸福	悲しみ	怒り	嫌悪		幸福	悲しみ	怒り	嫌悪
音声のみ	音声					音声				
	幸福	7	1			幸福	8			
	悲しみ		5	1	2	悲しみ		6	1	1
	怒り	1		6	1	怒り		2	6	
	嫌悪		2	2	4	嫌悪		1	1	6
表情のみ	表情					表情				
	幸福	5		2	1	幸福	6	1	1	
	悲しみ	1	4	2	1	悲しみ	1	4	1	2
	怒り		1	5	2	怒り	3	2	3	
	嫌悪		2	4	2	嫌悪			3	5
音声+表情	表情+音声					表情+音声				
	幸福	8				幸福	7	1		
	悲しみ		4		4	悲しみ		5		3
	怒り		1	7		怒り		1	7	
	嫌悪		5	2	1	嫌悪			1	7

◆正答率：「音声のみ」においてやや低く、「表情のみ」においては著しく低い。また、「音声+表情」においては低い。
 ◆混同：「音声のみ」「表情のみ」において【快-不快】の混同が認められる。

◆正答率：「音声のみ」においては、ほぼ健常者平均であり、「音声+表情」においては、やや低い程度であるのに対し、「表情のみ」では低い。
 ◆混同：「表情のみ」「音声+表情」において【快-不快】の混同が認められる。

I氏：		「幸福」の表情識別訓練				
		1	2	3-1	3-2	3-3
◆視知覚 特別な困難は認められない ◆コミュニケーションのタイプ 特定の型に分類されない ◆訓練の必要性 タイプL / 訓練可能性：あり ◆感情の理解： 感情を表す4つの言葉（嬉しい・悲しい・怒っている・嫌だ）とそれ ぞれの感情を感じる場面についての 説明が適切であるとはいえない。特 に「不快」な感情については、当 初、「ありません」「あまりありま せん」などを頻発し、回答がなか なが得られなかった。	顔の要素	合言葉	特徴 表情を作る	自己 教示 (外顕)	自己 教示 (内潜)	
	△	○	○ ○	○	○	
	「目・口・口のしわ・鼻の横しわ」		3-1：「目と口、及び口のしわ」			
「人の顔を見るのは時々、ちょっと苦手」						
		← 1回目 →				

「悲しみ」の表情識別訓練					「怒り」の表情識別訓練						
復習	4-1	4-2	4-3	4-4	復習	5-1	5-2	5-3	5-4		
合言葉 特徴の確認	顔の要素	表情を作る	自己教示 (外顕)	自己教示 (内潜)	「幸福」「悲しみ」 弁別課題	合言葉 特徴の確認	顔の要素	表情を作る	自己教示 (外顕)	自己教示 (内潜)	「幸福」「怒り」 弁別課題
○ ○	△ ○	○	○	○		△ ○	○	○	○	○	○
4-1：「目と口。目が小さい」 4-4：2回連続正解 ★台詞については、いずれも1度で暗唱ができ、当該セッション間、間違えることはなかった。					5-1：「怒っている顔を見るのは嫌です」と発言するなど、拒否的な態度が認められた。 特徴としては、「目・口・口のしわ・目が怖そう」 5-4：1回実施/正解 ★台詞については、いずれも1度で暗唱ができ、当該セッション間、間違えることはなかった。						
← 2回目 →					←						

「嫌悪」の表情識別訓練					4感情の表情識別訓練①				
復習	6-1	6-2	6-3	6-4	復習1	復習2	6-4	般化	
合言葉 特徴の確認	顔の要素	表情を作る	自己教示 (外顕)	自己教示 (内潜)	「幸福」「悲しみ」「怒り」「嫌悪」 弁別課題	合言葉 特徴の確認	台詞の確認	「幸福」「悲しみ」「怒り」「嫌悪」 の弁別課題	プロトタイプ 写真の弁別課題
○ ○	△ ○	○	○	△	○	○	△		
5-4：1回実施/正解 6-1(要素)：「目・口・鼻の横しわ」 6-4：1回実施/不正解 誤り：20代男性 「悲しみ」→「怒り」 20代女性 「嫌悪」→「怒り」 40代男性 「怒り」→「悲しみ」 ↓ 「悲しみ」と「怒り」の特徴を確認後、弁別課題 5回実施/4回正解(3回目で誤りあり) 誤り：20代男性 「悲しみ」→「怒り」					6-4：1回実施/不正解 誤り：20代女性 「悲しみ」↔「怒り」 「嫌悪」→「悲しみ」 20代男性 「怒り」→「悲しみ」 40代女性 「嫌悪」→「怒り」 ↓ 「悲しみ」と「怒り」の特徴を確認後、弁別課題 3回実施/後半2回連続正解 誤り：40代男性 「悲しみ」→「怒り」 ↓ 「怒り」と「嫌悪」の特徴を確認後、弁別課題 4回実施/後半2回連続正解 誤り：40代女性 「怒り」↔「嫌悪」 20代男性 「嫌悪」→「怒り」				
← 3回目 →					← 4回目 →				

4感情の表情識別訓練②				4感情の表情識別訓練③			
復習1	復習2	6-4	般化	復習1	復習2	6-4	般化
合言葉	特徴の確認 台詞の確認	「幸福」「悲しみ」「怒り」「嫌悪」の弁別課題	プロトタイプ写真の弁別課題	合言葉	特徴の確認 台詞の確認	「幸福」「悲しみ」「怒り」「嫌悪」の弁別課題	プロトタイプ写真の弁別課題
○	○	△		○	○	△	○
<p>6-4 1回実施/不正解 誤り：20代男性 「幸福」 → 「悲しみ」 20代女性 「嫌悪」 ← 「悲しみ」 40代男性 「嫌悪」 ← 「悲しみ」</p> <p>↓</p> <p>★混同が多いため、16枚の中から、「悲しみ」「怒り」「嫌悪」をそれぞれ選択するという課題を実施 「怒り」と「嫌悪」は正解 「悲しみ」は選択に時間がかかり、また、誤って「嫌悪」の写真が選択された</p> <p>↓</p> <p>間違いを訂正して6-4に戻る</p> <p>6-4：2回実施/連続正解</p>				<p>以下のような順序で復習をした。</p> <p>①「幸福」「怒り」の弁別課題 → 2回実施/1回正解 誤り：20代男性 「怒り」 → 「幸福」</p> <p>②「幸福」「悲しみ」「怒り」の弁別課題 → 1回実施/1回正解</p> <p>③6-4 2回実施/不正解 誤り：20代男性 「嫌悪」 → 「悲しみ」 40代男性 「嫌悪」 → 「怒り」</p> <p>★「体の調子があまりよくないこと、実践トレーニングで疲れていること」が話題となる → 訓練時間を短縮するために一部、マニュアルとは異なった順番へ</p> <p>④プロトタイプ写真の弁別 1回実施/1回正解</p> <p>⑤プロトタイプ写真を含めた20枚の弁別 誤り：プロトタイプ 「悲しみ」 → 「嫌悪」</p>			
← 5回目 →				← 6回目 →			

4感情の表情識別訓練④			
復習1	復習2	6-4	般化
合言葉	特徴の確認 台詞の確認	「幸福」「悲しみ」「怒り」「嫌悪」の弁別課題	プロトタイプ写真の弁別課題
○	○	20枚の弁別課題	
○	○	△	
<p>プロトタイプ写真を含めた20枚の弁別 (2回実施/1回正解) 誤り：20代女性 「悲しみ」 → 「嫌悪」</p> <div style="border: 1px dashed gray; padding: 10px; margin: 10px 0;"> <p>訓練終了基準には達していないが、回数の制約のために、ビデオによる中間評価となる。</p> <p style="text-align: center;">ビデオによる評価</p> </div>			
← 7回目 →			

(1) 写真による訓練課題の達成度

写真を用いた訓練では、「幸福」「悲しみ」「怒り」「嫌悪」の4感情の識別が十分に達成されたとはいえない。特に、細かい点（たとえば、鼻わきの「しわ」）にこだわり、台詞に代表される特徴のすべてに注目することは困難であった。これらのことから、本対象者においては、さらに訓練を重ねる必要があったと考えられる。

しかしながら、訓練に用いなかった人物に対する般化の課題では正しく感情が識別できるなど、より一般的な場面に対応できる可能性は示唆された。

(2) 訓練効果

写真を用いた訓練修了後の評価では、「表情のみ」においては、正答率・混同の傾向ともに改善が認められなかった。しかしながら、「音声+表情」においては正答率に関して改善が認められた。

(3) 訓練過程での変容と今後の課題

I氏のケースでは、対人的な問題、具体的には「挨拶の仕方」や「女性との距離の取り方」などが問題点として挙がっていた。このため、表情識別訓練と併せて、対人距離の取り方についても時間を設けた。

① 表情識別訓練プログラムに関して

他者の表情をみることについては、「人の顔を見るのは時々苦手」という発言にもみられるようにあまり得意ではない様子であった。特に「怒り」の写真を並べると、「怒っている顔を見るのは嫌です」と反応するなど、不快な表情をみることには抵抗が強い。

「怒った顔をみたらどうしたらいい？」の質問に対して、「もっと腹を立てると思う」と回答するなど、一般的な会話の中では、ズレが生じることもあるが、基本的に言語的な指示に対する理解力は高い。また、訓練用の短い台詞はほとんどの場合、1度で覚えることができる。

細かい表情の特徴を指し示すことができるものの、表情からの感情の識別訓練では、3～4回目で混乱が見られた。その後、5回目では若干の改善が認められたが写真課題修了の基準を達成することはできなかった。I氏の場合、台詞や手順の理解については問題がないが、一部（たとえば、しわ）をみると他の部分をみることなく回答してしまうなどの傾向が認められ、それは7回の訓練では完全に修正するには至らなかった。ただし、写真を1枚ずつ見て評価する課題で混同が認められた場合でも、複数枚の写真を「比較」することによって自ら修正が可能であったことを考えるとさらに訓練を重ねることで改善が認められる可能性が高い。

訓練に関しては、「『まめではなくしょん』の台詞は紙に書いて覚えました」（2回目）という発言にみられるように、積極的な関与が認められた。

②挨拶／対人距離について

◆挨拶： I氏において課題となっていた「挨拶」についてどのように考えているのかを実習の場面为例として尋ねた。その中でI氏は、実習で大切なことを「言葉遣いと顔」と表現した。また、『朝、人に会ったら何という？』については「おはようございます」「帰るときは、さようなら」と回答するなど、知識としては適切であるといえる。

ただし、知らない人に対して実際に挨拶できるかという質問には、「ちょっと……」と自信がなさそうな回答となった。このため、知らない人に対しても挨拶する必要があることを話し合う。

一方で、『相手が、おはようっていったら？』という質問に対して「おはようございます」と回答するものの、「(相手が)おはようっていうのは変です。『おはようございます』です」とコメントする。これに対しては、目上の人や会社の先輩はそういう場合もあると説明すると納得する。

このようなコミュニケーションに対する「思いこみ」の例は他にもあると思われるが、基本的な部分は言語での説明で修正可能であると思われる。

◆対人距離：(若い女性に過度の接近があり、職業準備訓練場面で注意された経緯がある)

若い女性と話すとき、男友達と話すとき、会社などで面接を受けるとき、などについて、それぞれの程度の距離をとったらいいかを尋ね、実際にその距離をとってもらった。

男友達との距離は、80cmから1m程度

若い女性との距離は、男友達よりは少し遠い距離

面接の場面での距離は、若い女性との距離よりもさらに少し遠い距離

をとり、場面によって距離を使い分けるというスキルは持っていることが確認された。

この距離については、職業準備訓練の場面で注意を受けたときに説明されたという。また、このことについて「だれも(今まで)教えてくれなかったので……(わからなかった)」というコメントがあった。このため、再度、「男友達との距離は、手を伸ばすと触れあう程度、若い女性との距離は、手を伸ばしても触れないくらいの距離がお互いに『安心』して話せる距離である」という話をする。本人も納得している様子であった。

今後の課題として、I氏においては、コミュニケーションの基本的なルールについて、1つ1つ確認していく作業が必要である。その際には「思いこみ」に対するこだわりの強さを考慮すれば、「○○ができるから、この程度のことはできるだろう」という保証は難しいといえる。

この事例は、言語理解の能力の高さが思いこみの修正に効果的に働く一方で、本人のこだわりのありようによっては、言語による行動化を基礎とする訓練プログラムの推進に抑制的に働くこともあることを示唆するものといえる。

4. まとめ

表情識別訓練プログラムを通して、「表情のみ」「音声+表情」において改善が確認できなかった3事例では、対象者の訓練に対する積極的な関与が認められたこととは別に、課題遂行を抑制する要因が明らかとなった。

これらの要因には、「台詞が覚えられない」「台詞が覚えられても、保持できない」「台詞の一部にこだわり、台詞の示す複数の要素に対応できない」などが挙げられた。したがって、表情識別訓練プログラムの対象者の選定基準としてこれらの要因を新たな追加事項として検討することが求められたといえる。

しかし、こうした事例であっても、対象者の特性を考慮し、訓練の間隔を短くしたり、回数を増やすなどの対応をすることで、改善が認められる可能性もある。この点については、今後の課題としたい。